
満洲の記憶

第3号

『石崎操日記』——朝鮮・新義州からの引揚げ記録——

.....執筆：石崎操 解題：飯倉江里衣、湯川真樹江
整理：石崎清之、飯倉江里衣、湯川真樹江、尹国花、森巧

故立岡皓男氏所蔵資料目録 飯倉江里衣、尹国花
大野絢也、菅野智博、瀬尾光平、森巧、湯川真樹江

『わが心のハルビン』記事目録 佐藤仁史ほか

岡山ハルビン会調査記 菅野智博

中国黒龍江省鶴崗市調査記 佐藤量

満鉄留魂祭参加記 湯川真樹江

寄贈資料目録 / 2015年度研究会活動記録 / おしらせ

「満洲の記憶」研究会

2016年10月

『石崎操日記』

——朝鮮・新義州からの引揚げ記録——

解題

飯倉江里衣、湯川真樹江

『石崎操日記』は、朝鮮半島の新義州で敗戦を迎えた石崎家の引揚げ過程を記したものである。本日記には、1945年9月3日に伝達された「新義州駐屯ソ聯軍司令官ノ命令」と、石崎家が1946年9月29日に引揚げを開始してから、博多に到着する1946年10月31日までの33日間の行程が記されている。ここでは、日本敗戦直後の朝鮮半島情勢と日本人の引揚げ状況を概観し、本日記の史的価値について言及する。

なお本日記は、執筆者・石崎操氏のご子息である石崎清之氏によって提供された。石崎清之氏は、2014年10月1日付けの『読売新聞』（多摩版）に掲載された本研究会に関する記事をご覧になり、連絡をくださった。本研究会では石崎清之氏との面会および史料の確認・調査を経て、本日記を公開することを決定した。解題の後ろにある2枚の写真も石崎清之

氏から提供いただいたものであり、写真1は1946年10月24日の日記の内容で、写真2は石崎操氏と家族の記念写真である。このような貴重な史料を本研究会に提供くださった石崎清之氏に心より御礼申し上げたい。

1 石崎操氏の経歴と朝鮮

石崎操氏は、1899年6月に山口県で生まれ、1924年に拓殖大学商科を卒業後、朝鮮の新義州にある鴨緑江製材無限制会社に入社した。1931年には平安木材株式会社支配人に就任し、敗戦まで鴨緑江林産株式会社の常務取締役などの要職を歴任した。朝鮮半島北西部の鴨緑江河口附近に位置する新義州は平安北道第一の都市であり、近隣の森林が豊かであったことから20世紀初頭より伐採業が盛んであった。

1945年8月15日、日本の無条件降伏

によって朝鮮が日本の植民地支配から解放された。それによって8月21日には元山へソ連軍が、9月8日には仁川へ米軍が進駐し、38度線を境に南北それぞれにおいて占領統治を開始した。石崎家がいた新義州には、8月30日にソ連軍司令官チスチャコフ大将らが進駐した。31日にソ連軍は、平安北道の行政その他一切を朝鮮人の平安北道臨時人民政治委員会に引き渡すことなどを命じている。『石崎操日記』のはじめに記された「新義州駐屯ソ連軍司令官ノ命令」はその時期に発せられ、9月3日に平安北道臨時人民政治委員会産業部長代理・金景場氏によって日本人に伝達されたものであった。

朝鮮北部からの正式な引揚げは、1946年12月から1947年7月までの計13回にわたって実施されたが、石崎家の引揚げはこれより前の時期に行われている。朝鮮北部ではソ連軍進駐後、各地で移動禁止命令が出されていた。しかし、多数の死亡者が出たことから、大半の日本人は1946年2月末より38度線を越えて南下することを決断したのである。『石崎操日記』で描かれるように、朝鮮各地の日本人は引揚げるまでの間、「日本人の保護と治安確保」のために組織された日本人世話会の援護を受けた。新義州の世話会は、ソ連や朝鮮側と引揚げや労務に関する交渉なども担った。

一方、朝鮮南部からの日本人引揚げ事業は米軍政庁の下で管理された。朝鮮南部各地でも日本人世話会が結成され、

1945年10月頃から引揚者名簿の作成や、引揚げ順位の決定といった出発準備のほか、引揚げ列車での輸送業務なども行われた。特にソウル(旧京城)や釜山の日本人世話会は、石崎家のような朝鮮北部からの避難民の受入れ・引揚げ業務も担った。

石崎操氏は鴨緑江林産株式会社の引継ぎ業務を行い、1946年9月29日に新義州を出発するが、その道のりは苦難に満ちたものであった。本日記には、その間の食事や米軍からの要求、38度線を越える際の苦労や経由地での状況などが記されている。石崎家は1946年10月12日に38度線以南の議政府に到着し、駅近くの畑や野原に建てられた米軍のテント収容所で約2週間を過ごしている。

石崎操氏と家族は、新義州を出発した約1か月後の11月1日に博多へ上陸して、親しい友人が住む島根県津和野町に1年間身を寄せ、その後一家は東京へ移住した。引揚げ後は、同じく朝鮮から帰還した元社員の名簿や彼らの再就職を求める「製材工場起業嘆願書」、「在外私有財産返還請求書」などを作成し、元社員の福利厚生にも尽力した。これらの書類には石崎家が朝鮮で所有していた不動産や株式などの情報が記され、1962年の在外私有財産の返還補償請求時にも活用された。1964年7月に石崎操氏が死去したことに伴い、本日記を含む遺品は石崎清之氏ら遺族によって保管されることとなった。

2 日記の史的価値

次に、本日記の史的価値について述べる。第一に、これが過去を振り返って書かれた回想録ではなく、引揚げの最中に記された史料であるという点があげられる。敗戦後に、ソ連軍占領地の朝鮮北部から引揚げた人々による回想録はこれまでにもあるが、その当時の状況を移動しながら書き残した日記は極めて珍しい。引揚げの過程においては、多くの日本人が生活困難に陥り、過酷な逃避行を経験した。このような状況下で一個人が日記を記すことは大変難しく、たとえ記録していたとしても、混乱の中で紛失したり、引揚船に乗る前に没収されたりするケースが多かった。したがって、幾多の困難を乗り越えて、石崎操氏が本日記を無事に日本まで持って帰ってきたことには稀有性が認められる。また本日記を通して、石崎家の家族の様子や日々の行動のほか、収容所での食事、物価（柿、薯、餅など）などの詳細な情報も確認することができ、そこから公文書にはほとんど記されることのなかった引揚げ過程の日常を知ることができる。

第二に、本日記に描かれる人々の多様性である。本日記には、石崎家の人々のほかにも、新義州の日本人や日本人世話会の関係者をはじめ、ソ連軍、米軍、柿や栗を売りに来る朝鮮人の姿も描かれている。従来の日本人の引揚げに関する研究では、移動する日本人の経験に焦点が当てられる傾向にあった。しかし実際には、

本日記からも明らかなように、日本人は移動する過程において様々な人々との接触があり、ときには衝突し、交渉しながら日本を目指して進んでいったのである。本日記からは、その移動過程における石崎氏の心境をもうかがい知ることができる。

第三に、石崎家が暮らしていた新義州のように、満洲と朝鮮の国境付近の都市からの引揚げについては、これまで十分に研究が進められてこなかった。たとえば、満洲からの引揚げが葫蘆島や大連などの海路だけでなく、朝鮮半島を經由して釜山から引揚げたケースも多かったことはあまり知られていない。ソ連参戦の1945年8月9日前後より、満洲全土から約6万人もの人々が朝鮮北部に避難し、その多くは南部の港（釜山など）を經由して日本に帰還している。本日記にも、議政府へ到着した石崎操氏が「先着者安東ヨリ約350名アリ」（1946年10月12日）と記しているように、満洲の都市である安東（現丹東）から日本人が引揚げていたことも確認できる。そのため、在満日本人の引揚げ経路には在朝日本人とも重なる部分があり、引揚げ過程における朝鮮での経験は、在満日本人の記憶にも影響を及ぼしたと考えられる。本日記は、在朝日本人の引揚げ研究にとってはもちろんのこと、在満日本人の研究にとっても重要な手がかりを提供している。

本研究会は、本誌にこの貴重な日記を掲載することで、朝鮮あるいは満洲から

日本への引揚げというこれまでの直線的な引揚げ像からは必ずしも見えてこない、より複雑で多様な移動状況の一端を示すことができると考えている。なお、本日記の後ろには地図「石崎一家の引揚げ経路」と、「石崎家からのメッセージ」を付した。あわせて参照いただきたい。

主要参考文献：

ブルース・カミングス著、鄭敬謨・林哲・加地永都子訳『朝鮮戦争の起源 1 解放と南北分断体制の出現——1945年 - 1947年』明石書店、2012年

森田芳夫『朝鮮終戦の記録——米ソ両軍の進駐と日本人の引揚』巖南堂書店、1964年
満蒙同胞援護会編『満蒙終戦史』河出書房新社、1962年

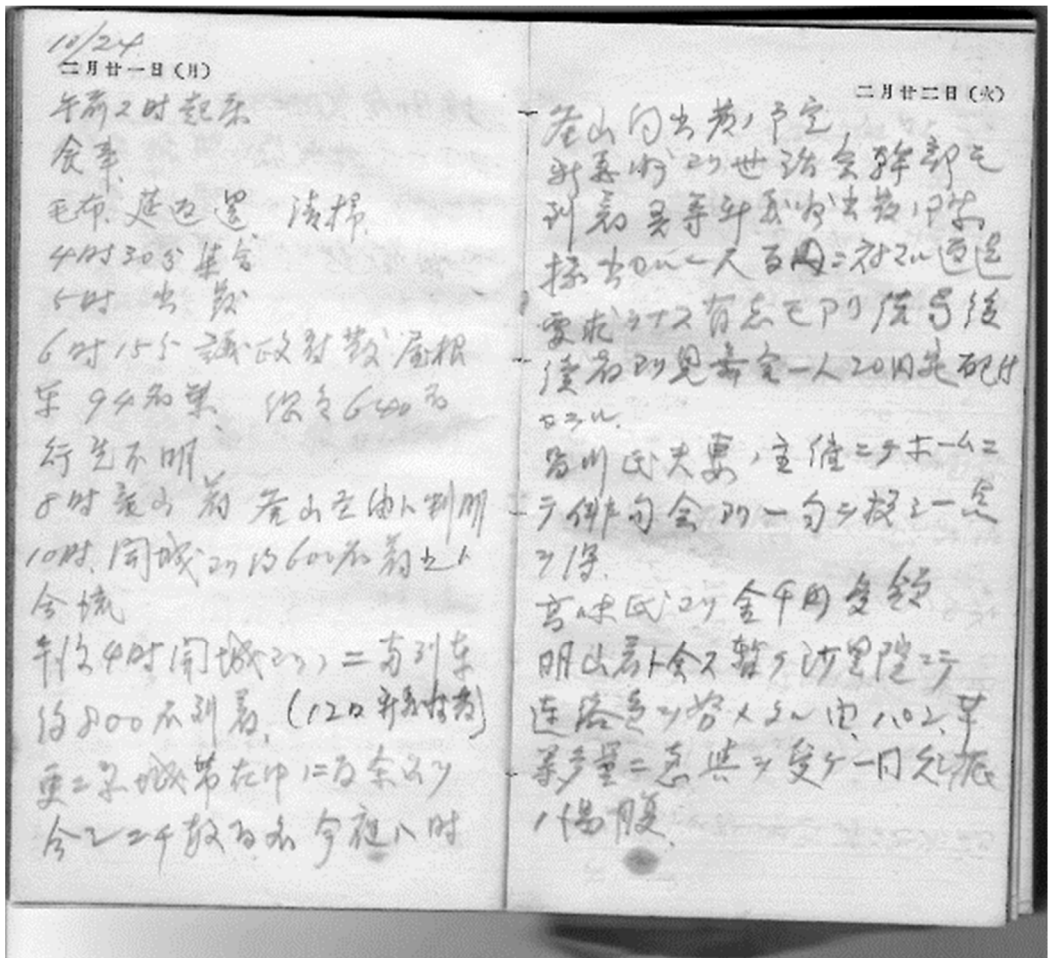


写真1 『石崎操日記』1946年10月24日



写真2 石崎一家の記念写真（1944年、新義州にて）

注記：長男・健男氏が1944年に海軍飛行予科練習生に志願し、家を出発する前の記念写真。右から父・操氏(45歳)、長男・健男氏(17歳)、長女・安子氏(13歳)、次男・義人氏(11歳)、三男・清之氏(6歳)、次女・トモ子氏(2歳)、母・戸羽氏(42歳)。

『石崎操日記』

執筆：石崎操

整理：石崎清之、飯倉江里衣、湯川真樹江、尹国花、森巧

凡例

- ・旧字体や異体字、略字、旧かな使い、「鮮人」「鮮女」などの蔑称は、本日記の史料としての性質を考え原文のまま掲載した。
- ・誤字と思われる箇所はそのまま掲載し、「ママ」とした。
- ・句読点、空白、改行は適宜記入した。

本文

新義州駐屯ソ聯軍司令官ノ命令

- 1.日本人所有ノ工場ニ所属スルー一切ノ有形無形ノ財産ニ対シ其ノ管理保管権ヲ平北臨時人民政治委員会ニ引継グコト
- 2.責任者ハ即時引継書ヲ作成ナシ産業部長ニ提出スベシ 但シ未備ナルトキハ数日内ニ提出シテモ之ヲ妨グズ
- 3.倉庫及金庫鍵ハ産業部長ニ引継ギ工場ノ鍵ハ作業ヲ繼續スル限り朝鮮人従業員自治会ニ引継グコト
- 4.日本人従業員ハ従前通り従業ナシ産業部長ノ許可ナクシテ職場ヲ離レルコトヲ得ズ

- 5.工場ノ朝鮮人従業員ハ直ニ自治会ヲ結成ナシ従来通り作業ヲ繼續ナスベシ
- 6.工場ニ事故発生ナシ損害ヲ生ジタルトキハ其責任ハ日本人従業員側ニアリ
- 7.在庫品ノ處分及移動ハ産業部長ノ命令ニヨル
- 8.工場ノ作業ヲ無断中止或ハ休業ナスコトヲ得ズ
- 9.八月十五日以後工場ヨリ物品ヲ持出シ隠匿セルモノアル場合ハ九月五日以内ニ現場ニ返納スベシ 若シ期限ヲ経過シテモ返納セザルモノハ国有物ノ破壊又ハ竊盗罪ヲ犯シタルモノト認メ之ヲ嚴罰ニ處

ス

以上

昭和二十年九月三日午後四時新義州事務所ニ於テ平北臨時人民政治委員会産業部長代理金景場氏ヨリ傳達、九月三日迄ニ引継書作成ヲ約ス。

9/29

午前5時宿舍出發林産会社繫筏場ノ乗船場ニ六時集合嚴重ナ税関検査ノ上 和船永吉丸(17 屯)ニ乗船、浜町 198 名ニテ船内狭ク荷物置場ハ勿論座席モナク窮屈此ノ上ナシ、船体修繕一部未完ノタメ本日出發見合せ一同新義州ニテ船内宿泊ト決定

9/30

本日ヨリ陸行ハ数日間停止トナリタル由ニテ残留者ノ不安一方ナラズ、世話会ニ押寄せ今後ノ生活費ニ付強談中、之ガ前後措置トシテ本日海路出發者一人ニ付百円宛ヲ更ニ残留者生活資金トシテ據出スルコトハナル

食糧 10 日分

現金 200 円

其他荷物トシテハ五点以内ノ下着類雨具等

午後2時出發準備完了、

船團 機械船 4 隻

帆船 7 隻

外ニ警備船 1 隻

團長 道城京一

永吉丸分團長 中山高次

午後3時出帆

午後五時龍巖浦海上警備隊前ニ碇泊

明朝係官臨檢ノ上出帆許可スル由ニテ

船内宿泊、夜中寛野森吉海中ニ隧(ママ)

落シタルモ折柄ノ上ゲ潮ニテ他船ニ救助セラル

10/1

午前八時ヨリ検査、刃物 写真 書類等十二時頃出發

途中洩航ロープノ切断等アリ 鉄山沖ヲ過グル頃漸ク暮色濃厚、船室内立針ノ余地ナク板トマノ上ニテ一夜ヲ明ス

10/2

黄海道沖ニテ夜明ケ

雨雲天ヲ蓋ヒ陰鬱ノ天候

午後ヨリ小雨混リニ南風吹き船ノ進行遅々タリ

長山串ニカハル頃サスガ天下ノ難所ニ加ヘテ風雨漸ク強ク乗員一同船酔ヒ甚ダシ時ニ午後三時、夜ニ入りテ益々風強ク船團ハ航行停止 風静マルヲ待ツコトハナリ、碇ヲ降ス 午後七時、夜半風ハ西ニ変リ益々風浪激シク吾永吉丸モ碇綱ノ切断氣使ハレ帆走準備ノタメ荷物ノ片附ケヲナス

船底ハ浸水甚ダシク「アカ」ノクミ取ニ忙シ

午前一時頃遂ニ吾ガ船ハ難破ノ危険ヲ感シ 単独行動ニテヨリ安全地ニ避難スルコトハ決定

僚船ノ安否不明

10/3

船長此ノ辺ノ地理ニ詳シキ為メ吾船ハ安全地ニ避難スルヲ得タルモ

他船ノ安否氣使ヒツ、到着ヲ待ツ 夜来ノ風未ダ静マラズ依然波高シ、

十二時迄他船ノ到着ヲ待チタシモ到着セズ、吾ガ船ノ單獨潮浦ヘ向ケ出発

午後三時潮浦着 漸ク港内波静カニシテ一同蘇生ノ思ヒ、折柄ノ引潮ニ船ノ周圍ニテ はまぐり拾ヒニ興ジ一人約一升ヲ得タリ、

夜半ノ満潮ヲ利シ潮浦海岸ニ到着 船中宿泊

10/4 晴

遼(ママ)船未ダ到着セス 一昨日来ノ暴風雨ニ事故發生セルモノカ、或ハ吾船ノ行衛不明ノタメソー才索(ママ)ニ日ヲ送りシカ、又ハ豫定ヲ変更シテ甕津ニ直行セルモノカ、兎モアレ吾等ハ一先ツ上陸シテ次ノ満潮ヲ待チ他船ノ到着ナクハ單獨行動ニテ越境ニ衆議一決 午前十時上陸開始、米一合宛ヲ出シ炊出シヲナス。十二時頃沖合ニ僚船ヲ認メ一同歡喜續々入港シテ吾船ノ沖ニ投碇ス

折柄保安署員、ソ軍將校等現場ニ到着、道城團長、杉山工作班長等ト協議ス ソ軍ノ意向トシテハ海州ノ司令部ヲ至(ママ)由新義州司令官ニ電照シタル上ナシデハ上陸許可セズトシテ吾等一旦上陸セルモノモ再ビ乗船ス

食糧漸ク欠乏シテ空腹ヲ感ズ

10/5 晴

上陸ノ許否如何心痛シツ、夜ヲ徹ス

寒サ甚シク睡眠不足ト空腹ノタメ疲労甚ダシ、

午後一時頃才一線トシテ上陸許可セラル直チニ出發用意、思フニ昨夜来ノ本部及工作班ノ工作宜シキヲ得タル為カ、布團、毛布、藥品、米、等ハ持出し禁止、

其他今後不用品ト思ハレルモノハ全部残置スルコト

二時才一分團トシテ出發

トモ子山路ヲヨク歩く、約一里半ニテ國境ニ到着此處ニテ又嚴重ナ税関検査 現金ノ取上ゲモ出タラメナリ、薄暮漸ク進行開始

約一キロニテ三八線ソ軍才一線ニ到着ス之ヨリ約二里 念佛司部落ヲ目指シ山路ヲ歩行、

午前0時頃空腹ト疲労ノ極、漸ク念佛司着直チニ警察ノ世話ニテ倉庫内ニ入り 食事ノ配給ヲ待ツ

折カラ米軍来リ当地ニ停止スルヲ許サズ直チニ之ヨリ3斤茄川迄進行シテ宿泊セヨトノ命令、

食事ノ終ル迄待タレタシト懇願セルモ許サレズ一同再ビ出發用意

途上ニ整列シテ握メシノ配給ヲ受ケ歩キナガラ食ス

午前二時茄川着

米軍ノ身体検査ノ後倉庫内ニ才一分團

380名宿泊

落吾(ママ)者モ少ナカラズ。

10/6 曇

倉庫内コンクリート上敷物ナク寒サト背ノ痛サモ疲労ノ極 一睡ノ内ニ夜明ケ。

夜半米軍派遣隊ヨリサービスガールノ供出ヲ命ゼラレタルモ一同不安ノタメ志願者ナシ、昨夜来ノ空腹 12時頃漸ク炊出シ握飯一人2個(一日分)配給

正午頃ヨリ鮮婦ノ柿、薯等賣リニ来ル者アリ皆争ヒ買フ、

柿 四ヶ 10円

薯 3ヶ 10円

餅 1ヶ 5円

粟 1合 10円

夕刻念佛ヨリ荷物到着 米軍ノ検査、米軍サービスガール6名漸ク出デ自働(ママ)車ニテ宿舍ニ到リ約三時間ニテ帰リタリ、夜4名行ク。

後續部隊来ラズ

米軍ハ此所ヨリトラックニテ甕津ニ送り仁川ヨリ船ヲ向ニ来ラス云フモ未ダ本船到来ナク出發出来ズ 或ハトラックノ余猶ナキ為トモ云フ。

10/7 晴

本日モ握飯ニツ一日分ニテ他ハ薯ノ買食ヒニ餓ヲ忍グ、

後續部隊来ラズ 夜間雨降り倉庫雨漏リ甚ダシク睡眠出来ズ 寒サ甚シ、

米軍指令部ヨリ情況視察ニ来ル

10/8

後續分團念佛ニ到着ノ報アリ、本日モ出發出来ズ 徒歩ニテ出發セント志望シタルモ米軍ニテハ単独行動ヲ許サス 後續分團ノ到着ヲ待テトテ無為ニシテ一日ヲ送ル

10/9 晴

後續分團ハ全部念佛ニ昨日到着セル由十時ニ到リ本日午後一時蘇江浦ニ向ケ出發(徒歩)行程(四里)ノ命令アリ、

荷物ハ一個十円ニテ牛車ニ託送

戸羽、トモ子兩人徒歩不能ニ付牛車ニ便乗賃銀百円、

午後二時茄川出發 念佛ニテ本團全部ニ合流、

午後四時念佛出發 各分團長蛇ノ列ヲナシ 乗船場蘇江浦ニ向フ此間約四里。

十二時蘇江着 遙カ沖合ニ本船碇泊スルヲ見ル、午前四時迄ニ乗船不能ノモノハ積残スニ付後續分團ニ連絡員ヲ派ス

米軍当局ヨリ乗船ニ付嚴重ナ命令アリ、命令ニ服従セザルモノハ乗船ヲ拒絕スルト云フ、

浜ニテ米ニ合宛ノ配給ヲ受ケ直ニ炊事、一鍋ヲ食シ更ニ一鍋船中ノ用意トス、

午前五時オ一便ハシゲニ 200名乗込ミ本船ニ至ル、

本船ハ米上陸用舟艇約 2700 屯ヲ改装セル貨物船ニシモ乗船人員定員約一千名ニ 2700 名ヲ乗ス計画ニテオ一便乗船者ハ船内ノ荷物片附仕役ヲナス、

乗組員ハ船長以下全部日本人ナリ、午前

六時頃迄ニ約 1000 人ヲ乗セ

10/10 晴

退潮ノタメ午後ヲ待ツ、夕刻約 1800 名乗込ミ、船倉及甲板満員、夜ヲ徹ス午後 7 時愈々出帆 明朝十時仁川着ノ予定ノ由、船中ノ食事ハ唐モロコシノ粥約一合程ニテ到底空腹ヲ満スニ足ラズ

10/11 曇後雨

午前 8 時仁川港外着満潮ヲ待ツ、十二時岸壁着 三時上陸開始、直チニ無蓋車約 25 輛ニ乗車、五時仁川發、七時龍山着 折柄降雨一同ヌレ鼠トナル、午後 10 時迄待チタルモ発車セズ ホーム上家ニ雨除シケタルモ寒サ嚴シク空腹甚シケレドモ疲労ノタメ假睡ス 午前四時頃雨中再び乗車命令 直チニ議政府ニ向フ

10/12

午前六時議政府着、容(マ)収(マ)所迄約二軒 議政府檢疫所約二百ノテント 周圍栗林ニ清流アリ風景絶佳、一天幕收容人員 60 名 米人主任 Honer 日本人世話会京城本部ヨリ植木主任、神谷両氏万端ノ世話ヲナシ團ヨリ各役員ヲ指名 先着者安東ヨリ約 350 名アリ 阿部氏ト会ヒ種々便宜ヲ受ケ 300 円借用

新義州組 9 月 17 日陸行組 250 名モ收容中 山田、前川等陸行者ノ苦心モ一方ナラズ

午後コレラ、チブス豫防注射及種痘施行 10 月 7 日新義州發ノ陸行組ハ既ニ開城ニ入りタル情報アリ 長沢氏モ開城ニアリト之等ハ青丹ルートニ回ルモノニシテ歩行四里 最モ楽ナ途ヲ通ツタ思(ママ)ト思ハル。

天幕割当後直ニ全員集合主任 Honer 氏ヨリ幕舎生活ニ対スル注意アリ、尚、植木、神谷両氏ヨリモ詳細ナ注意ヲ受ケ今後約一週間ノ收容所生活ノ概況ヲ説明セラル

尚最近ノ内地事情及帰還者ニ対スル待遇等ニ付種々情況聴取ス 毛布各一枚宛筵ノ配給 筵二枚ニ家族六名寝ル狭シ

10/13

清掃仕役、午前 9 時檢便 收容所食事 朝 ダンゴ 五個

汁 一杯

昼 スープ 腕(ママ)1 杯

夕 ダンゴ 五個

汁 一杯

ダンゴハ小麦ノ挽割リタルモノヲ二弍銅貨大ニナシユデタルモノ、空腹甚ダシク、補給ヲ要ス、売店アリパン、餅、菓子、飴、味噌、カン詰、タバコ、等アレド野菜高価ニシテ腹ヲ満ス得ス

薯ヲ補給シ餓死ヲ忍グ
 ムシ薯 100 匁 12 円
 生薯 〃 10 円
 餡パン 1 ケ 5 円
 リンゴ 8 円
 大根 三本 18 円

10/14

終日空腹ヲ押ヘテ休養、出發以來 16 日
 漸ク栄養不良ノ徴現レタルカ身体ケダルク
 便所ニ行クサヘフラフラトナル、
 蘇江浦ニテ炊残シノ米約四アリ 1 合五
 勺ヲ粥ニシ一家昼食ノ補給トス。

10/15 雨

午前十時全員集合
 ホーナー主任ヨリ本日午後 1 時 600 名出
 發命令ヲナス
 安東及新義州ノ先着者ナリ、残りモ二、
 三日中ニ出發出来ル見込ミ
 夕刻ヨリ雨降り寒サ強シ

10/16

10/17 曇 小雨

午前十時全員集合ホーナー主任ヨリ本日
 午後 0 時 2,000 名出發命令アリ 一同歡
 崑 残り 600 名モ数日中出發ノ予定ノ
 由、
 幕舎別抽籤ノ結果選ニ漏レ残留 600 名ノ
 内トナル、
 十一時出發セルモ列車編成ノ都合ニヨリ
 再び帰り、各自テントニ入ル、

夕頃 前主任 Haretman 氏ノ視察アリ構
 内清掃不充分トテ全員清掃、Old latrine
 ノ土盛ヲナス 食事特配、
 午後六時清掃検査不合格 全員ニテ再ビ
 全般特ニ便所清掃 暗クナリ終了、
 本日出發延期ノ 2000 名ハ明朝午前 6 時
 ト午後 1 時ニ分レ出發ノコトニ發表
 米皆無ニシテ大根ヲ補食ス

10/18 晴

午前八時、仕役
 ダンゴ原料タル製粉工場ニ至ル小麦 70
 俵トラックニ積ミ八時天幕出發 工場ニ
 テ一日製粉作業、昼食ハ粉ヲ支給セラレ
 工場職員ノ家ニテ自炊久シ振ニテ腹一杯
 食スルヲ得タリ、
 残り乾燥シテ各自 7、8 個持ち帰ル、午
 後五時作業終了徒歩ニテ幕舎ニ帰り仕役
 食事ノ特配ヲ受ク
 本日午前五時 800 名 午後一時 1,200 名
 出發

残留 600 名ハ仕役ニ忙シ

戸羽子配給部へ仕役 食事支給セラル、
 幕舎 21 号ヨリ 1 号ニ移ル残留者 600 名
 ノテント整理ノタメ

毛布一枚宛ヲ増配セラレ気温モ天候回復
 ト共ニ暖シ

10/19 晴

全員ニテ不用天幕 50 ノ取片附ケ作業、
 相変ラズ構内清掃ヤカマシ 時節柄栗ノ
 落葉掃ケドモ掃ケドモ落葉シテ婦人子供
 モ總出動、戸羽子配給部ノ仕役ニテ特配

ヲ受ケ一家潤フ、秋日和定マリタル為カ
暖カシ

10/20 晴

日曜日ニテ仕役モ低調。
終日為スコトナク腹ノ空クコト少シ 但
シ昨日特配ノダンゴ残りシ大根ト共ニ煮
テ昼食補給。

今日ハ出發出来ルカト思ヒシニ日曜ノ故
カ命令ナシ。

京城ニ邦人 500 名發待期(ママ)中トノ情
報アリ 之ト合流シテ明日ハ出發可能性
大ナルモノ、如シ

米五合配給ヲ受ク ¥45.00

芋 100 匁配給 ¥6.00

米ノ闇相場 1 斗 1.400—

芋 一貫 90.—

大豆 5 合配給 1 升 40 円

10/21 晴

トモ子昨夜ヨリ腹痛(ママ)微ナ下痢
安子清掃仕役。

Old latrine ノ土盛工事ニ終日出役シタル
モ特配ナシ。

本日出發命令ナシ。

吾々 600 名ニテ幕舎ガ空トナルニ依リ仕
役其他ノ都合上出發延期セラル、ニ非ズ
ヤトノ質問ニ対シ植木主任ハソソナ事ハ
決シテ無イ、600 名ノ出發遅延ハ總テ米
軍ノ輸送計画ニ依ルモノニテ軍政廳運輸
局長ノ権現(ママ)ニ付 Horner 主任ヲ通ジ
京城へ連絡出發促進方依頼スルコト、セ
リ トノ事ナリ。

夕食後植木氏ヨリ英字新聞ニ表レタル東
京ノ話題發表アリ。

本日ヨリ幕舎ヘカンテラー一個配給アリ。

10/22 晴

便所ノ清掃及 Old latrine ノ後仕(ママ)未
不充分ノ故ニテ昼ノスープ三時迄配給セ
ラレズ。

三時スープ配給今迄ヨリ濃厚ニシテ分量
多シ、鮮人炊事係ノ不正ニヨリ従来ス
ープモ稀薄ナリシヲ本日米軍直接原料配
給セル為ト云フ。

大豆 6 合配給アリ、イリ豆トス

米一合ニ大根菜ニテ雑炊ヲ作り補食

天幕に落葉の音や秋夜寒

天幕をたゝく落葉や秋夜寒

10/23 晴

米軍兵舎移転ニ仕役

米軍ハ奴隸ノ如ク仕役命令シテ武器、彈
藥其他兵營具ヲトラックニ積降シセシム
其間寸暇モナク急ゲ急ゲトセキ立テラレ
栄養不良ト空腹ニハ少シノ重量品モ仲々
動カズ疲労ノ極午前中ニテ切上ゲ

新義州ニ於ケルソ軍ノ仕役ト比較シテ一
同ソ軍ノ人情味ヲ追憶シナツカシガル
午後再ビ米軍仕役兵舎周圍地均シ工事。
京城世話会ヨリ一人当リ 20 円援助金交
附セラル。

明日六時出發ノ由神谷氏ヨリ聞ク、愈々
待望ノ日来ル

一同歡喜出發準備。

10/24
 午前2時起床
 食事、
 毛布、蓆返還、清掃、
 4時30分集合
 5時 出発
 6時15分 議政府發屋根東94名乗、總
 員640名行先不明
 8時 竜山着 釜山聖(ママ)由ト判明
 10時、開城ヨリ約600名着之ト合流
 午後4時開城ヨリノ二番列車約800名到
 着、(12日新義州發)更ニ京城帶(ママ)在
 中ニ二百余名ヲ合シ二千数百名 今夜八時
 釜山向出發ノ予定
 新義州ヨリ世話会幹部モ到着 吾等新義
 州出發ノ際據出セル一人百円ニ対スル返
 還要求ヲナス有志モアリ結局後續者ヨリ
 見舞金一人20円宛配布セラル。
 品川氏夫妻ノ主催ニテホームニテ俳句会
 アリ一句ヲ投シ一点ヲ得。
 高味氏ヨリ金千円受領
 明山君ト会ス暫ク沙里院ニテ連絡員ヲ努
 メタル由、パン、芋等多量ニ恵與ヲ受ケ
 一同久シ振ノ満腹。

落葉 秋の水

議政府キャンプ村 披講 龍山駅
 一九四六、一〇、二四

テント打つ落葉に覚めしゐたりけり
 光子
 掃きよせし栗の落葉のいと軽く
 光子

議政府の栗の落葉ハ忘るまじ
 光子
 制札も立ち兵も立ち秋の水
 雲溟
 名山へぬくる経なる秋の水
 雲溟
 月夜道落葉踏みて来るは誰
 孤仙
 落葉搔く人に落葉の一としきり
 千社
 罹災者に絵師あり落葉見て立てり
 千社
 秋水に浸したる手のよごれけり
 千社
 天幕の裾に集まる落葉かな
 井人
 洗はれて大根白し秋の水
 井人
 天幕をたゞく落葉や秋夜寒
 安子
 秋深み天幕をすべる落葉かな
 安子
 落葉敷き祖国を語る幾まどみ
 柿ひさぐ鮮女の顔の紅く映え
 ○疲れ果て夜寒いとはず眠りけ里
 ○国境を越えて想ふや柿の里
 旅疲れ茄川は柿の名所かな
 ○柿甘し祖国の秋や今如何に
 庭前に柿の熟れる警察署
 ○落人の夜寒しのぐや草蓆
 国越へて茄川の柿を味へり
 選 ダッ出ノ歎に柿の甘さかな

はろ／＼と国境越へて柿甘し
敷筵通す夜寒に目覚めけり
○国境を越えて気安き柿の味
波頭白く砕けて秋の海
秋の海ぼら白銀の孤を画く
ぼら跳ぶや復員の船数多あり秋の海

電業連絡所博多西小山町六番地
午後十時龍山發釜山に向フ、27 輛連結
ノ長蛇、

10/25

午前 9 時金泉着 栗、リンゴ
12 時大邱着。
リンゴ一籠 100 円 買入レタル處
中味屑リンゴノミ最後ノ鮮人ノ不道德ヲ
味フ
三時釜山着、埠頭倉庫二棟ニ収容セラ
ル、明日 500 名乗船出来ル由。
毛布一枚丈支給セラレ寝ニ付ク

10/26

午前 11 時乗船準備
船ハ内陸軍ノ上陸用舟艇 S.B.114 号、約
一千屯、
速力 5 浬、博多迄二十四時間ヲ要ス由。
午後 5 時出帆。
海上静隠(ママ)ナルモ船ノ構造上相当援
(ママ)レル

10/27

追風ナリシ為予定ヨリ早ク午後 2 時博多
港外ニ碇泊。

港内外復員船約 30 艘余リ 主トシテ米船
ナルモ心細シ。

檢疫 1 週間ノ予定

10/28

港外ニコレラ發生船モアリ海水使用ヲ禁
止セラル
コレラ予防注射施行
義人議政府出發以来風引キニテ食慾ナク
終日船内ニ寝て元氣衰フ。

10/29

午前中檢便。
パイ缶 3 ボンド宛(大缶 5 人ニ 2 個)配給
アリ、子等毳ぶ。
午後 2 時俳句会
兼題 柿、秋の海
席題 夜寒、
選句
柿熟れて一つ／＼に西日あり 千社
石を置く屋根目の下や柿紅葉 安井
復員の船數多ある秋の海 未僧
旅疲れ茄川の柿に憩ひけり 未僧

夕食後甲板ニテ演藝大会開催
船員側モ多数出演 9 時迄一同歡ヲ喜ス

俳句題 秋晴 コスモス 沙魚
上げ潮や沙魚釣る人の忙しさ
コスモスを分けて訪ね来る寺の客
寺訪へばコスモス答へ僧の出ず
コスモスの咲くにまかして峠茶屋
秋晴れて手拭黒し避難民

との駅もコスモス咲ける満浦線
 コスモスへ投げたひとみや旅やつれ
 帰還者をもてなす夕餐沙魚二つ
 沙魚釣らで秋雲眺めみたりけり

10/30

選句
 床下に差し来る潮や沙魚の宿
 千社
 鐵扉固く閉せる宿の秋桜
 安井
 日章旗褪せてマストに秋晴るゝ
 蒼雨
 ドア押してコスモスの庭に下りにけり
 安井
 清流を引ける離宮や秋桜
 千社
 寺訪へばコスモス答へ僧出です
 未僧

援護局ヨリ派遣員上船種々上陸手續ヲ指
 示セラレ乗車券請求、新円交換等ノ準備
 ヲナス、午前七時サロンニテ句会入選、
 句前記ノ通り。

愈々明朝岸壁着ノコトニ決定

10/31

午後2時岸壁着。
 明朝七時—九時ニ上陸ト決定、義人依然
 食慾ナシ
 カタール性黄疸ト診察セラレタルモ手当
 方ナシ 万事下船ノ上トス。
 現金交換ニ付、才3分団取纏メ交換ヲ依
 頼セラル
 總額 45879 円
 本日同ジク接岸ノ復員船アリ。
 呼ビテ問ヘバ9月2日新義州發ノ途中船
 内コレラ發生ノタメ今日マデ上陸不能ナ
 リシト

石崎家からのメッセージ

「石崎家からのメッセージ」は、石崎家の三男・清之氏および長女・安子氏が数年前に日記を整理した際に記録したものである。研究会では、この記録も引揚げ経験の記憶にまつわる貴重な資料であると考え、日記と共に掲載することにした。

【清之氏】

父、操が他界して40年、母、戸羽が亡くなって23年、妹、トモ子が4年前にそして昨年兄、健男が他界しました。生者必滅とは言え寂しい限りです。

父の死後、昭和19年の東綿繊維工業(株)の手帳に引揚げ当時のメモが残されていた。鉛筆書きで薄れ、また旧字体で判読しにくい物ですが、今回、安子姉の記憶をかり注釈も入れて整理して見ました。

夫々の子供たち孫たちは、戦中、戦後の苦労話はテレビや、映画で見ただけで祖父、祖母、父、母にこんな苦労があったとは思ってもよらないことでしょう。

内容的には面白くも可笑しくもない、ただ、石崎家の歴史の一端が此処にあったことを見てほしいと思います。

このメモには健男兄は出てこない。健

男兄は、昭和19年志願して予科練(海軍飛行予科練習生)に入隊したが、九死に一生を得て本土で終戦を迎えました。

そして、親、妹、弟の引揚げを待っていたのです。

【安子氏】

石崎一家は北朝鮮新義州という中国との国境の町で終戦を迎えました。敗戦ですから当然住んでいた家を追い出され一間のクーリー(労働者)の小屋に住み、引揚げの日まで父は労働に借り出され、私もマッチ工場などに働きに出て、日本に帰れる日まで一年二ヶ月待ちました。

引揚げに際して、リックは帯芯を表に裏地に布団生地等を使って作り、帰国してそれで布団等を作りました。父は桐の板で弁当箱を作り、当時千円札が出たばかりで持ち帰っても果たして使えるかどうか不安がありましたが、家族のことを考え工作してかくし持って帰り、それが使えたので大助かりでした。

義人や清之のパンツのゴムの部分に100円札を入れ無事発見されずに持ち帰れました。リックの肩ひもの部分に縫い込んだお札は途中で食料などに使うことが出来ました。

故立岡皓男氏所蔵資料目録

飯倉江里衣、尹国花、大野絢也
菅野智博、瀬尾光平、森巧、湯川真樹江

凡例

本研究会では、既に解散した岡山ハルビン会の中心人物であった故立岡皓男氏が所蔵する史資料を整理し、目録を作成した。調査に至った経緯や故立岡皓男氏所蔵史資料の詳細については、同号に掲載されている「岡山ハルビン会調査記」を参照されたい。

故立岡皓男氏所蔵史資料は、書籍や会報、名簿、書簡、未発表原稿、写真、音声映像テープ、会旗、記念品など多岐にわたる。本目録は多様な史資料のなかで

文献史資料の書誌情報を中心に公開するものである。

史資料形態は、書籍・会報・冊子・名簿・地図の5項目に分類した。表題、著者・筆者、出版社、出版年の各項目については、文献内に記載されているものをそのまま掲載している。出版・作成時期が不明の場合は記載無とした。また、掲載は出版・作成年の時系列順としている。

目録

形態	表題	著者・筆者	出版	西暦
書籍	哈爾濱グラフ		哈爾濱新聞社	1937
書籍	活用ロシア語読本 日本(1巻)	小串任		1939

地図	最新地番入新京市街地図			1941
書籍	東・北満事情 附哈爾濱觀光案内	哈爾濱興信所	哈爾濱興信所	1941
名簿	会員名簿（電業互助会）	電業互助会	電業互助会	1959
名簿	会員名簿（電業互助会）	電業互助会	電業互助会	1961
書籍	作戦要務令 現代企業に生かす軍隊組織	安藤亮	日本文芸社	1962
書籍	石井楚江選集	石井真一	石井楚江遺稿刊行会	1963
名簿	石頭会名簿 現住所確認者名簿		石頭会事務局	1964
書籍	ある勇気の記録 凶器の下の取材ノート	中国新聞社報道部	青春出版社	1965
書籍	小説 陸軍	火野葦平	原書房	1966
書籍	赤木雅二先生遺稿と回顧録	角田民蔵	大阪市立市岡商業高等学校同窓会	1967
名簿	会員名簿（満州電業会）	満州電業会		1971
名簿	石頭会 元関東軍石頭予備士官学校（歩兵第2下士官候補者隊 満 13981 部隊）在籍者名簿・部隊資料	石頭会事務局 第3回会合幹事会		1973
書籍	戦いの跡 関東軍歩兵石頭予備士官学校第13期幹部候補生		石頭会	1975
書籍	戦友 「戦いの跡」別冊 戦闘記録の作成を支えたもの		石頭会	1975
書籍	楨幹 関東軍石頭予備士官学校第13期生の記録	石頭会楨幹編集委員会	石頭会事務局	1977
書籍	私の八月十五日 富士見町・益田実氏の「日記」を中心に	東村山市立図書館	東村山市立図書館	1978
書籍	虜囚の詩 シベリア抑留	原田充雄		1978

書籍	シベリア虜囚記 画文集	佐藤清	未来社	1979
書籍	望郷一遙かなる母校一	岡山あかしや 会	岡山県あかしや会事務局	1979
冊子	石頭会中国支部 第三回総会			1979
書籍	満ソ殉難記	満ソ殉難者慰 霊顕彰会	秀巧社	1980
書籍	楨幹 続	石頭会楨幹・ 続編集委員会	東京学習出 版社	1980
書籍	シベリアの悪夢・善夢 終戦 から抑留・帰国まで	山崎寿吉	東京学習出 版社	1980
書籍	満洲・敗戦記録珠玉集	満洲と日本人 編集委員会	大湊書房	1980
冊子	あかしや 第 16 会総会記念	第 16 回 総会 実行委員会	岡山県アカ シヤ会事務 局	1980
冊子	石頭会第六回全国大会 元関 東軍石頭予備士官学校第 13 生 会		第六回全国 大会実行委 員会	1980
名簿	関東軍石頭予備士官学校 第 13 期生名簿『昭和 55 年 2 月 10 日現在』	石頭会		1980
会報	電業会報 (253, 426, 499 号)		満洲電業会	1981, 1997, 2002
冊子	岡山県アカシヤ会 第 17 回総 会			1981
冊子	56 年度満洲電業会岡山支部総 会			1981
冊子	大東亜戦争の背景 真実と虚 構を正す	柴田正		1981
書籍	もうひとつの満洲	沢地久枝	文藝春秋	1982
書籍	話せばわかる 犬養毅とその 時代 (上・下)	山陽新聞社	山陽新聞社 出版局	1982

書籍	三江懐古	延原聴夫	福岡刑務所 作業課	1982
書籍	思い出の満洲電業 秘話・裏 ばなし 各地・各職場 I	満洲電業外史 編さん委員会	満洲電業会	1982
会報	石頭会中部支部便り (9号)		石頭予備士 官学校第13 期同期生会 事務局	1982
冊子	歳末街頭募金活動所感	村岡英一	私家版	1982
冊子	岡山県アカシヤ会 第19回総 会	岡山アカシヤ 会		1983
冊子	幻の都 ハルビン案内	下里猛		1983
名簿	満洲電業会岡山支部 会々員 名簿 昭和58年9月作			1983
名簿	満洲電業ハルピン会名簿			1983
書籍	旧満州を往く 中国東北の旅 今甦る一面坡、牡丹江、寧 安、石頭	石毛義雄	原書房	1984
書籍	北満の曠野に眠る吾子を偲ん で	那須道子	私家版	1984
書籍	抑留記 カランチン	善木武夫	道書房	1984
会報	猪股大隊便り (19, 22, 28号)			1984, 1985, 1989
会報	石頭会報 元関東軍石頭予備 士官学校 第13期生の会・会 報 (2~9, 11~14, 22, 23, 40, 42 号)	石頭会会報編 集委員会・石 頭会本部		1984~1989, 1994~ 2007
冊子	昭和59年度岡山県帰国者友の 会自立更生研修会資料	岡山県帰国者 友の会		1984
冊子	第七回全国ハルビン会岡山大 会			1984
冊子	第4回第2中隊会 第6回中 国支部 岡山大会	関東軍歩兵石 頭予備士官学		1984

		校 第 13 期甲 種幹部候補生		
書籍	哈爾濱物語 それはウラジオ ストクからはじまった	杉山公子	地久館	1985
会報	関西石頭 (7, 12, 14, 15, 17～ 19, 23, 26 号)	石頭会関西支 部		1985, 1987～1991
書籍	闘魂	戸田章	私家版	1986
書籍	長井家の人々	山下正信	私家版	1986
会報	鉄友だより 九州版 鉄友会 宮崎大会に想う (28 号)	杉山清太郎		1986
会報	免渡河だより (7, 特集号)	免渡河会		1986, 1987
冊子	国旗と国歌	柴田正	岡山県美作 地区教育振 興会	1986
冊子	首相の靖国参拝見送り問題 “A 級戦犯” 合祀の経緯を問 う	田中正明	私家版	1986
冊子	第 7 回石頭会中国大会 関東 軍歩兵石頭予備士官学校第 13 期甲種幹部候補生			1986
名簿	出席者名簿 石頭会関西支部 石頭会第 10 回関西支部総会	関東軍歩兵石 頭予備士官学 校 第 13 期甲 種幹部候補生		1986
書籍	ベンガルの潮騒 第二集 ヤ ンテージへの長い道		つわもの会 ビルマ慰霊 巡拝団	1987
書籍	まだ見ぬ肉親を求めて 身元 未判明中国残留日本時孤児名 鑑	厚生省援護局	厚生省援護 局	1987
書籍	まだ見ぬ肉親を求めて 身元 未判明中国残留日本時孤児名	厚生省援護局	厚生省援護 局	1987

	鑑（追録）			
会報	鉄友だより 関西版（27号）		満鉄鉄友会 関西支部連 合会	1987
会報	東京ハルビン会 報（24, 25, 31, 33, 40, 42～44, 引揚特集号）	東京ハルビン 会・全国ハル ビン会		1987, 1990, 1991, 1993, 1994
冊子	誰かビルマを思わざるくベン ガルの潮騒抜刷＞	石田和男		1987
冊子	山口県石頭会第8回大会 関 東軍歩兵石頭予備士官学校	第13期甲種幹 部候補生		1987
書籍	日・中両語で異なる熟語集	高見進		1988
会報	九州石頭会報 元関東軍歩兵 石頭予備士官学校第13期甲種 幹部候補生（3～6号）	石頭会九州支 部		1988, 1989
書籍	アサヒグラフ 天皇陛下崩御 昭和の時代終わる		朝日新聞社	1989
書籍	遠謀 第二百四師団司令部 史	三ノ上澄雄	穆稜会戦史 部	1989
書籍	返り花 自選短歌集	山崎豊子	私家版	1989
書籍	鬼哭 東満国境 ソ連侵攻 死闘 石頭教育隊	小枝守	私家版	1989
書籍	きらめく北斗星の下に シベ リア抑留画集	シベリア抑留 画集出版委員 会	シベリア抑 留画集出版 委員会	1989
書籍	忘れなの記 明治・大正・昭 和に生きた一野人の記録	田中精次	私家版	1989
冊子	第10回 石頭会全国大会	関東軍歩兵石 頭予備士官学 校 第13期甲 種幹部候補生		1989
冊子	第10回石頭会全国大会	元関東軍歩兵		1989

		石頭予備士官 学校第13期甲 種幹部候補生		
名簿	満洲電業会岡山支部 会員名簿 平成元年6月1日現在			1989
書籍	シベリア捕虜収容所の記録 極秘資料写真集 ダモイ（帰国）を夢見た日本兵の記憶が今よみがえる！		読売新聞社	1990
書籍	世紀を生きて	岡雄一郎	太平電業株式会社	1990
書籍	墓標なきみたま 塚も動け昭和の鎮魂賦	渡辺武	私家版	1990
会報	会報キリトマ便り ソ連抑留キリトマシャート収容所（4,6,11～14号）	ラーゲル・キリトマ会		1990, 1992, 1997～2002
冊子	白い青春 ある「候補生」のシベリア抑留記	星野光男		1990
冊子	北方四島問題 今こそ学ぼう	中川八洋	平和日本を守る岡山県民会議	1990
冊子	石頭会訪中慰霊団報告集 石頭会日中友好訪中団 石頭会訪中慰霊の旅	石頭会		1990
名簿	満洲電業会岡山支部会員名簿 平成2年			1990
名簿	満洲電業会岡山支部第19回総会資料			1990
冊子	さらば哈爾濱 また来る日まで	赤松勉		1991
冊子	第11回石頭会全国大会	関東軍歩兵石頭予備士官学		1991

		校第13期生		
冊子	張子の虎・日本分断を救 う！！敢て満州散華の英霊に 捧ぐ	西淳	私家版	1991
名簿	会員名簿（満州電業会）	満州電業会		1991
書籍	激動の昭和を吾かく歩めり	前田武一	私家版	1992
書籍	酷寒（哈爾濱）の大地炎 熱（比律賓）地帯を歩いた生 命	高田吉久	私家版	1992
冊子	真実 猪股房子遺稿集	秋田県石頭会	秋田県石頭 会	1992
書籍	岡雄一郎追悼録	岡雄一郎追悼 録編集委員会	太平電業株 式会社 満 洲電業界岡 雄一郎追悼 録編集委員 会	1993
書籍	新説・南京攻防戦 生証人た ちが叫ぶ南京戦の実相	前川三郎	日本図書刊 行会	1993
書籍	大東亜戦争は正当防衛であつ た！ 改訂版 占領軍により 目かくしされた史実 戦争を 根絶する策を日本から提唱せ よ	山本建造	福来出版	1993
書籍	あかしや「想」 平成六年 度（記念）	岡山県アカシ ヤ会	岡山アカシ ヤ会事務局	1994
書籍	いざさらば我はみくにの山桜 「学徒出陣五十周年」特別展 の記録	靖国神社	展転社	1994
書籍	鬼哭 スターリンの生贄 シ ベリア残酷物語（第2部）	小枝守	私家版	1994
書籍	満洲第六〇四部隊の思い出	岡山延吉会終	岡山延吉会	1994

	終戦五〇年記念文集 関東軍歩兵延吉予備士官学校	戦五〇年記念文集編集委員会		
書籍	満洲第六〇四部隊の思い出 終戦五〇年記念文集 関東軍歩兵延吉予備士官学校	岡山延吉会終戦五〇年記念文集編集委員会	岡山延吉会	1994
書籍	夕映え	日高一	山陽新聞社	1994
冊子	石頭会椋代孝湊川隊始末記	椋代孝		1994
冊子	北方領土について	石井幸夫	私家版	1994
冊子	第11回石頭会中国支部大会	元関東軍歩兵石頭予備士官学校第13期甲種幹部候補生		1994
書籍	英霊の言乃葉 石頭揭示集第一輯(昭和三十五年八月～昭和四十二年十二月)		靖国神社	1995
書籍	語り継ぐあの日あの時 戦後五十周年	平和日本を守る岡山県民会議		1995
書籍	台湾に生きる大和魂 終戦五十周年	鄭春河	吉武進	1995
書籍	遙かなる思い出 終戦五十周年記念誌	作州満洲会事務局	作州満洲会	1995
書籍	孫たちとの会話 終戦五十年 日本と靖国神社の行く末を考える	桑木崇秀	全国戦友会連合会	1995
書籍	わが青春の満洲 満洲電業社員養成所回想録	満洲電業養志会 終戦五十周年記念文集編集部	満洲電業養志会	1995
冊子	今日われ生きてあり 前進座		オペラ通り	1995

	公演[戦後五十周年記念公演]		商店街振興 組合	
冊子	鎮魂 第13回石頭会全国大会	関東軍歩兵石 頭予備士官学 校第13期甲種 幹部候補生	関東甲信越 支部実行委 員会	1995
名簿	満洲電業会岡山支部 会員名 簿			1995
書籍	援護の歩み 戦後50周年記念	岡山県	山陽新聞社	1996
会報	ぶりこ (76~80 最終号)			2002, 2003
冊子	石頭会九州支部第15回鹿児島 大会	関東軍石頭予 備士官学校第 13期生	石頭会九州 支部 鹿児 島支部	2002
書籍	八十年の轍	河和幸憲	私家版	2003
書籍	遙かなる黒龍江 北満州に眠 る「国境守備隊」跡を訪ねて	小林静雄	有朋書院	2003
書籍	想起賦	岡田卓造	私家版	2006
書籍	ろう人と共に歩いて公園と車 イス	越岡多勢子	私家版	2008
書籍	遙かなる回想	高崎彌生	私家版	2009
書籍	共に輝いていた	越岡多勢子	私家版	2009
書籍	哈爾濱市日本人民会小史 要 約	加藤一郎	私家版	記載無
冊子	目次特集 No. 13~80 ぶり こ (80号別冊)			記載無
冊子	牛歩不撓	川崎清		記載無
冊子	響け雄叫び石頭まで	石頭会		記載無
冊子	保定幹 秘録 昭和20年8月 八達嶺長城にて	保定幹部候補 生隊13期 村 松記		記載無
冊子	石頭会 関東軍歩兵石頭予備 士官学校第13期生の集い			記載無

冊子	母校最後の戦闘 第3回石頭会 (昭4.8. 2.3 於名古屋市) における報告			記載無
冊子	響け雄叫び石頭まで	石頭会		記載無
冊子	わたしの満洲愛唱歌			記載無
冊子	シベリヤ抑留画展目録			記載無
冊子	黒川薫の軍歴			記載無
冊子	敗戦② 牡丹江戦線で敗戦後の行動『シベリア抑留生活』昭和二十三年九月十九日日本の土を踏むまで	石川忠男		記載無
冊子	満洲電業会岡山支部総会のあゆみ			記載無
冊子	思い出の軍隊生活(初年兵時代) 旧歩兵第十連隊の記録	神崎伸起		記載無
冊子	詔勅集 詔勅碑建立記念		直毘会	記載無
冊子	わが青春は、戦時一色であった—私のシベリア— 金丸良造実史 昭和と共に(抜粋)	金丸良造		記載無
冊子	満鉄会に生きて 南満洲株式会社鉄友会懐顧録	畠中正一		記載無
名簿	石頭会相田分隊名簿 関東軍石頭予備士官学校第13期第5中隊			記載無
名簿	岡山県石頭会人名誌			記載無
名簿	岡山県国際交流団体連絡協議会会員名簿			記載無
名簿	石頭会相田分隊戦友会出席者名簿	立岡皓男	石頭会中国支部世話人会	記載無
名簿	岡山県石頭会人名簿			記載無
名簿	ライチハ石頭会会員名簿			記載無

名簿	石頭会 全国名簿 石頭会第 10回全国大会記念 元関東軍 石頭予備士官学校第13期生	石頭会		記載無
名簿	原隊別分 派遣者名簿			記載無
地図	昭和21年頃におけるソ連・外 蒙領内日本人収容所分布概見 図			記載無
地図	満洲国地図	大日本帝国陸 地測量部		記載無
地図	満洲帝国全図	国際地学協会		記載無
地図	石頭教育隊行動地域			記載無
地図	終戦当時満洲における熊本県 関係開拓団配置図			記載無
地図	掖河磨刀石戦線			記載無

岡山ハルビン会会報

『わが心のハルビン』記事目録

佐藤仁史、浅野慎平、井崎伶香、大賀友果梨、奥田有理、
熊野壮真、久保篤史、笹川純平、佐藤珠貴、坪井俊樹、
西村悠作、真門美里、弓田潤

解題

1 整理までの経緯

「満洲の記憶」研究会では、2013年7月に満洲帰国邦人団体が刊行した種々の会報の調査を国会図書館で行った。その際調査者の関心を引いたのが、『満鉄会会報』『大連会会報』『長春』といった日本各地に会員を擁し、長期間にわたって刊行された団体の会報以外に、二つのハルビン会の会報、すなわち、岡山ハルビン会による『わが心のハルビン』と東京ハルビン会による『東京ハルビン会報』であった。というのも、上述の三会報がニューズレター的な装いであったのに対し、年刊として刊行された後二者には、多くの回想記が収録されており、また会として明確な自己主張をしていることが印象的であったからである。これらの内容に興味をもった研究会の有志は、そのうち『わが心のハルビン』に掲載されていた元事務局の住所に手紙を出して関連資料

の有無を尋ねたところ、かつて事務局長をつとめた故立岡皓男氏(1924—2012年)のご家族より返信をいただき、2013年12月7日に訪問する機会を賜った。

岡山ハルビン会事務局は岡山市北区表町二丁目1-50の靴のタツオカ2階に置かれていた。靴のタツオカは県庁前や田町周辺に広がる繁華街の中心に位置しており、集会の便もよかったことが推測される。2階の窓横には現在でも岡山ハルビン会の看板がかけられている。故立岡皓男氏が遺した関連書籍や書類は、ご息女立岡洋子氏とそのご子息立岡海人氏によってほぼそのまま靴のタツオカ2階と自宅に保管されていた(どの程度の価値があるか判断できず、処分することも検討したという)。調査によって確認できた範囲で述べれば、保管されていた故立岡皓男氏の史料群は、岡山ハルビン会会報とその元になった原稿の一部、石頭会(関

東歩兵石頭予備工官学校) 関係資料、満洲電業株式会社関係資料、シベリヤ抑留関係の資料などからなる。このなかには、多くの写真、関東歩兵石頭予備工官学校第十三期甲種幹部候補生法被、様々な旗幟、中国残留孤児支援募金の箱などモノ資料も含まれており、山口淑子が岡山ハルビン会に宛てた色紙がひときわ目を引いた。

これらの資料群は現在研究会で預かって目録を作成している最中である。このうち、『わが心のハルビン』については、佐藤仁史が一橋大学において担当する2015年度社会史史料講読Ⅱにおいて記事目録を作成し、主要記事の読解を行った。以下はその成果の一部である。

2 内容の紹介

1977年に創刊号が発行された『わが心のハルビン』の毎号の巻頭には、「岡山ハルビン会設立の趣旨」が掲載されている。それを略記すれば、(1) 四季報の発行、(2) 互いの消息の確認、(3) 北方領土返還をはじめとする国民運動の展開、(4) 記録としての体験記の出版、である。これは本誌にとって非常に重要な意味を持っている。なぜならば、(1)(4)は直接本会報について言及したものであるし、(2)(3)で挙げられた趣旨は、本誌の数多くの体験記を読み解いていくと、会員に根付いた記憶のあり方を見て取ることができるからである。

本誌に体験記などを寄稿した会員がハ

ルビンを中心とする満洲において過ごした記憶は非常に多様である。満鉄の職員であった者、医師であった者、技術者であり戦後は八路軍に留用された者、シベリアでの抑留生活を送った者など、肩書のみをとっても多様である。

加えて、彼らを取り巻いた環境は更に多様であった。例えば民族関係について言えば、中国人や白系ロシア人、朝鮮人などとの多様な人間関係が当時ハルビンにあったことに言及されている。すなわち、五族協和は関東軍が作り上げた大義名分に過ぎなかった一方、ミクロな個人の中の生活の中には民族同士の「共生」も同時に存在していたことが見て取れるのである。

以上は表層的な部分を例示したに過ぎないが、個々の会員の記憶は相当異なっている。したがって本会の意義は、学校の同窓会誌のように、ある程度限定した範囲にとどまる思い出を互いに共有して回想していくというより、異なる体験・記憶を有する会員たちがそれらを記録として残していくという意味合いが強いように思われる。彼らを繋いだものは思い出の共有ではなく、自分たちの経験の記録を残して「国民運動」の土台とするというような意志であった。本紙をを通読した上で、設立の趣旨を読み返すと、この点が会員に共有されていたことが浮かび上がってくる。なお、ハルビンに住んだ当時の思い出以外の話題もしばしば登場する。中国残留孤児の問題について言

及する記事、1970年代以降にハルビンに再訪した際の印象を綴る記事も多い。

『わが心のハルビン』は、1995年にvol. 20を持って廃刊となった。最終号では廃刊への無念さを綴る記事も多い。この会報が2世や3世への継承を遂げることにはなかった。創刊号から最終号までを通読してみると、寄稿者はおおむね固定されており、年月を経るにしたがって記事の数が減少している。後期においては、その穴埋めとして他団体の会員の記事の引用なども見られた。

寄稿者がおおむね固定していたという点は本会報の特徴であり、これは次世代への継承に悩んだということと同時にしめしているが、この特徴により時間がたつにつれて、個々の会員の思い出のありかたがどのような変化していったかということを見ることができる。初期の記事は

ハルビンでの思い出を詳細に、ところどころ感情的に綴る文体が目立ったが（特にソ連軍から受けた被害についての言及において、怒りの感情が目立つ）、後期に向かうに従って、淡々とした文体に変化していく。あるいは、初期から後期にかけて、連続した回想録を残した杉本保之介氏のように、長大な記録を残した者もいる。いずれにしても、vol. 1からvol. 20を通読するによって、一個人の記憶のあり方の変化を追跡できる点も、本会報の資料的な価値を高めているといえる。

謝辞

故立岡皓男氏資料の整理と目録作成に快諾いただいた立岡洋子氏と立岡海人氏の両氏にはここに記して衷心の謝意を示したい。

凡例

- ・本目録は、帰国邦人団体の岡山ハルビン会が発行していた『わが心のハルビン』1～20号の記事目録である。当該会報の発行期間は1977年3月より1995年11月までである。
- ・本目録では、会報各号ごとに記事の情報を掲載頁、記事名、筆者の順に記載した。記事名、筆者の両項目は、基本的に会報記事内の表記をそのまま記載しているが、記事中の固有名詞以外は旧字体を新字体に変更している。
- ・お詫び・訂正記事、会費納入の案内記事、会計報告、執筆者の肩書きや所属、広告などは紙幅の関係上、本目録の記載対象から除外した。

目録

vol.1 (1977年3月発行)		
頁	記事名	筆者
1	岡山ハルビン会設立の趣旨	
2	岡山ハルビン会年譜	
2	耐えた力が行く	
3	消息	高地トミエ
5	消息	有森秀吉
6	消息	岩倉玉子
7	消息	川口和子
7	消息	今城松二郎
8	消息	猪木金人
10	消息	尾原繁
11	消息	大高武夫
12	消息	小野田貞子
13	消息	加藤かね子
13	消息	鴨矢久雄
14	消息	駒井収平
15	消息	桜井武士
15	消息	笹野二郎
16	消息	佐々木岩太郎
17	消息	清水良一
17	消息	白岩良平
18	消息	園田正文
18	消息	谷口廉
19	消息	谷口栄治
21	消息	武本博
21	消息	田口秀実・豊子
21	消息	田辺三郎

22	消息	永井時夫
24	消息	永友作雄
24	消息	野村瑞
25	消息	原田清
25	消息	稗田千代子
25	消息	稗田良夫
27	消息	稗田実
29	消息	広岡清美
29	消息	古松富美江
30	消息	三木郁三
30	消息	村岡英一
31	消息	室山花子
32	消息	村尾嶺上
33	消息	守井婦喜子
34	消息	森恵美子
34	消息	山本春枝
35	消息	山本雄吉
37	消息	横畑昌訓・みち
37	消息	渡辺昭子
38	図書閲覧案内	
38	あとがき	村岡英一

vol. 2 (1977年11月発行)		
頁	記事名	筆者
	まえがき	編集委員
	祝「思い出と消息誌」発刊	全国ハルビン会会長
		中村福造
1	岡山ハルビン会設立の趣旨	
2	岡山ハルビン会年表	
2	耐えた力が行く	
3	報告(1) 岡山ハルビン会の組織・規約・役員構成	
5	報告(2) 福田総理大臣宛上申書	

7	報告 (3) 友よ安らかに	
8	特報 娘は中国で生きていた	
9	就任挨拶	村岡英一
10	消息	亀山登美子
11	消息	高地トミエ
12	消息	有安輝男
13	消息	岩倉玉子
17	消息	猪木金人
23	消息	江草純子
23	消息	尾原繁
24	消息	大高武夫
26	消息	岡賢二
28	消息	河井善二郎
29	消息	北村武男
32	消息	酒井竹子
34	消息	笹埜二郎
35	消息	白岩良平
36	消息	白石賀代子
37	消息	数枝木寛
38	消息	谷口栄治
39	消息	田辺三郎
41	消息	竹内幸郎
42	消息	辻順子
43	消息	永井時夫
55	消息	稗田千代子
56	消息	稗田良夫
58	消息	稗田実
59	消息	村岡英一
63	消息	守井婦喜子
64	消息	山本雄吉
66	消息	山谷友夫
66	消息	横山斧吉

67	消息	渡辺昭子
67	図書閲覧案内	
67	図書斡旋	
67	東海ハルビン会編 哈爾浜グラフ案内	
68	あとがき	編集委員
69	会員名簿 (別紙)	

vol.3 (1978年11月発行)		
頁	記事名	筆者
	まえがき	編集委員会
	目次	
1	岡山ハルビン会設立の趣旨	
2	岡山ハルビン会年表	
3	岡山ハルビン会秋季総会報告 (昭和五十二年度於成田屋光利店)	
3	52年秋季総会報告	稗田良夫
3	東海ハルビン会岐阜大会参加報告	岸本佳吾
4	キリンビール瀬戸工場見学報告	笹埜二郎
5	全国哈爾浜会長崎大会の報告	村岡英一
6	全国ハルビン会々則 (昭和53・6・10)	
7	困窮者の救援活動について	竹内幸郎
8	書翰	高地とみ恵
9	書翰	坂上良知
10	書翰	後藤春吉
11	思い出の記	有森秀吉
13	破われた眼鏡	猪木金人
17	消息	江草純子
17	思い出の記	尾原繁
18	思い出の記	岡賢二
24	思い出の記	大高武夫
26	思い出の記	岸本佳吾
28	大陸での私の人生記録 (その一)	笹埜二郎

30	松花江の思い出	数枝木寛
31	第二の故郷ハルビン	杉本保之助
35	ペチカ	谷口栄治
36	北満における私の足跡	田辺三郎
38	「私のハルビン」とは	竹内幸郎
40	ハルピン地区周家の思い出	永井時夫
49	満州の思い出より	永井時夫
49	思い出の記	中島達二
60	消息	番遼子
62	地段街より馬家溝まで	稗田千代子
63	「いきの坂」	平松民恵
63	思い出の記	福島昇
66	思い出の記	堀博
67	消息	三木郁三
67	前承	村岡英一
75	ハルビンの初冬	森恵美子
76	思い出	山本雄吉
78	ハルビンの思い出	横畑みち子
79	思い出の記	頼経章
82	あとがき	
	会員名簿	

vol. 4 (1979年11月発行)		
頁	記事名	筆者
	まえがき	
1	岡山ハルビン会設立の趣旨	
2	岡山ハルビン会年表	
4	報告事項 (1)岡山ハルビン会 53年度秋期総会報告	
4	報告事項 (2)ハルビンを映画で見る会	
5	報告事項 (3)東海ハルビン会出席報告	村岡英一
5	報告事項 (4)龍爪会のご紹介と出席報告	村岡英一
6	哈爾濱旅行記	田中武熊

12	消息	後藤春吉
13	思い出す人々	猪木金人
16	追想記	岩倉玉子
17	消息	岡賢二
23	消息	尾原繁
25	消息	奥村富子
25	消息	大高武夫
31	思い出のハルビン訪問記	大岩節子
40	五族の墓	北村武男
40	一枚の風景画について思うこと	小林武俊
42	大陸での私の人生記録（その二）	笹埜二郎
44	太陽島の夏の思い出	白岩良平
45	ハルビンから熱河へ	杉本保之助
52	洪水の追想	数枝木寛
54	消息	高地とみ恵
55	バザール	谷口栄治
56	「私のハルビンとは」	竹内幸郎
58	あゝ大陸や	富永恭子
59	随感	永井時夫
62	雑感(山狗と綿袍八年)	中島達二
66	私のハルピン	檜崎敬一
67	恩師を語る	稗田千代子
69	八路軍が来た安東を逃れて瀋陽へ脱出	稗田良夫
72	消息	稗田実
73	愛の証明	平松民恵
80	消息	前野濤子
80	「ミンクス」の旅	丸川潔
81	護国の英霊に捧げるの道	村岡英一
84	万波白堂先生のこと	山本雄吉
89	会員消息	
89	消息	入江静江
90	困窮者の救援活動について	竹内幸郎

92	ハルピン小唄	
93	中国からの帰国者 追報	
94	あとがき	
95	会員名簿	

vol.5 (1980年11月発行)		
頁	記事名	筆者
	まえがき	
1	岡山ハルビン会設立の趣旨	
2	岡山ハルビン会年表	
3	訪中旅行の計画から実行まで	村岡英一
7	日中友好の翼に参加して	尾原繁
15	涙のハルビン	竹内幸郎
20	訪中旅行に参加して	尾原淑子
21	訪中旅行見聞記	村岡英一
30	北京の景、哈市の景	平松民恵
30	中国見たまま聞いたまま	岩倉玉子
31	「帰国者の消息と救援について」	竹内幸郎
32	全国市長会宛の礼状	村岡会長
33	日中平和友好の翼	岡山ハルビン会訪中団
35	ハルビン在住孤児の消息コーナー	
51	不思議なご縁	浜恒夫
51	三十五年ぶりに尋ね人を捜しあてゝ	東儀文孝
52	消息	大月敏代
53	哈爾濱引揚前後	数珠木寛
55	思い出の記	稗田千代子
56	八ミリを観て	猪木金人
58	慟哭再来中華民国	平松民恵
58	岡山ハルビン会の中国訪問によせて	正宗武男
60	満洲こぼれ話	永井時夫
75	撫順の近況	横谷豊吉
76	熱河省の大平房子	杉本保之助

81	大陸での私の人生記録（その三）	笹埜二郎
82	長春の孤児 郭秀珍さんのこと	大岩節子
85	痴人の思い	丸川潔
87	キタイスカヤ	谷口栄治
88	終戦後の一番永いよること	大高武夫
91	春季集会の報告	有森秀吉
92	憶い出の記	横山斧吉
94	私にとって満鉄は何であったか	田辺三郎
96	防衛議論	稗田良夫
99	禁煙十年	山本雄吉
101	全国ハルビン会大会出席報告	大高武夫
104	昭和五十四年秋季総会	村岡英一
106	残留孤児慰問募金芳名一覧	
107	保険による会基金協力者名簿	
108	あとがき	
109	名簿	
116	会計報告	

vol.6 (1981年11月発行)		
頁	記事名	筆者
	まえがき	
3	岡山ハルビン会設立の趣旨	
4	岡山ハルビン会年表	
5	五十五年度秋季総会報告	稗田良夫
6	五十六・春季集会の報告(永友記)	永友作雄
8	七周年を祝って	木村睦男
8	創立七年に寄せて	平沼赳夫
9	岡山ハルビン会創立七周年によせて	片山仁
9	周鳳英(42才)さんと三人の姉さんとの再会	金井喜美
11	一次帰国孤児を大阪に訪ねて	尾原繁
12	帰国者交流激励会について	数枝木寛
14	ご紹介	会長

17	洛陽市長表敬挨拶記（村岡記）	
19	第二水曜会のこと	会長
19	会の活動資金について	会長
21	会員・客員の便り	児玉廉平
21	会員・客員の便り	新田律六
22	会員・客員の便り	羅仙樵
22	会員・客員の便り	金丸ひさ
23	会員・客員の便り	大田原節子
23	会員・客員の便り	江草純子
24	会員・客員の便り	宮野美智子
24	会員・客員の便り	高地とみ恵
25	会員・客員の便り	竹内幸郎
28	会員・客員の便り	編集部
28	会員・客員の便り	編集部
28	会員・客員の便り	明日素玄尼
29	会員・客員の便り	山本慈昭
29	雑感	小林武俊
31	思い出の記	岡賢二
37	悲しかったハルピン時代と悲しい思い出の街ハルピン	立岡皓男
39	籠城	谷口栄治
40	北方領土問題について	笹埜二郎
41	怨念…北方領土①	村岡英一
47	満州こぼれ話（その二）	永井時夫
55	ハルピンからの討匪行	杉本保之助
59	「北方領土の日」に思う	村岡英一
61	書翰	後藤春吉
62	終戦に日に憶う	数枝木寛
64	日中友好（九州）の船旅に参加して	杉山清太郎
66	思い出	尾原繁
68	ハルピンの思い出と消息について	稗田千代子
68	無題（雑満州）	田辺三郎
71	嗚呼満鉄	丸川潔

72	日記代りの漢詩	山本雄吉
74	随想	岩倉玉子
75	ロシアで会った本との再会—ラーゲリ（露語で収容所）の回想 其の四一	猪木金人
77	如塵放言録	永井時夫
80	追憶	小野菊恵
87	ポートピア'81で思う	茂渡志満代
88	昔のハルビン・今の東北	城造
89	追憶	長尾喜久治
92	敗戦後引揚までの苦難の日日 ◎招かざる客の来訪 別記 残留孤児について思うこと	大高武夫
98	山陽新聞「ちまた欄」転載	横山斧吉
100	養父母を岡山に迎える蜂谷さん一家	
101	慟哭のハルビンへ（一）（或 ノートより）	平松民恵
111	ハルビン懐古	鳥岡利導
112	「岸壁の母」死す もうひと月生きていてほしかった	椋代孝
117	満洲事変をかえりみて	稗田良夫
120	ハルピン会入会の動機と私の決意	藤原武志
121	日中孤児問題連合会に入会するの件	会長
124	岡山ハルビン会会則	事務局
126	保険による会の基金への協力者名簿	事務局
127	あとがき	編集委員一同
128	会員名簿	
134	役員名簿	
135	客員名簿	
136	本会に御支援下さった方の御芳名	
141	会計報告	
142	旧満州国全図	

vol.7 (1982年11月発行)		
頁	記事名	筆者
	目次	

3	まえがき	
4	岡山ハルビン会設立の趣旨	
5	岡山ハルビン会年表	
7	五十六年度秋季総会報告	稗田良夫
11	57・春季総会の報告	事務局
13	岡山ハルビン会備前支部創設	笹埜二郎
14	七号紙の発行を祝って	木村睦男
14	岡山ハルビン会創立八周年によせて	平沼赳夫
14	中国東北地方友好の旅	数枝木寛
21	中国友好の旅を終へて私の感想	山本春雄
22	追憶と友好の旅を終えて	林義正
26	第二次訪中団に参加して	石原常雄
30	中国東北地方の追憶と友好の旅に寄せて	権藤良男
34	訪中旅行の印象	数枝木寛
36	街頭募金の実施について	村岡英一
38	第二回中国残留孤児集団招待について	平松民恵
40	第二次帰国孤児を迎えて	尾原繁
43	中国残留及帰還孤児の消息	事務局
43	中国残留及帰還孤児の消息	永井時夫
44	中国残留及帰還孤児の消息	谷本日上
45	中国残留孤児の詩「おたっしゃですか。お母さん」	平松民恵
45	引き揚げ家庭に“お年玉”を	羽根岡伝治
46	訪日残留孤児を迎え	平松民恵
46	帰国者交流激励会について	尾原繁
48	中国派遣日本語教師の壮行会	村岡英一
49	熟年のたのしみ waley と李白（近況報告に代え）	猪木金人
52	祖国を恋いて	植野常子
52	私と満洲そして哈爾濱 あとがき 随想	大高武男
57	思い出の記（2）	岡賢二
64	思い出の糸をたぐりて	金井喜美
69	ハルビン会に入会させて頂いて	河口豊
70	ふれ合う心をもとう	佐上静夫

71	ソ満国境の討匪	杉本保之助
74	ハルピンの幽な想い出	杉山清太郎
75	義勇軍訓練生の終焉(1)	竹内幸郎
80	私の在満記	頓宮一郎
81	軍歌に憶う	永井時夫
95	世相談義	稗田良夫
100	充実の年 私の一九八二年	福田義矩
103	辺境の地のある青春の記録	藤井幸男
107	「言葉アラカルト」 明治・大正の郷愁	丸川潔
110	「湊川隊」始末	椋代孝
117	一時局随想― 現下の教科書問題	村岡英一
122	ソ連 恐るべし (北方四島に寄せて)	猪木金人
123	国旗を掲げよう	佐上静夫
124	「台風の高野山詣で」	竹内幸郎
128	如塵放言録 (第二回)	永井時夫
130	返せ「北方領土」	稗田良夫
133	戒厳令解除宣言	村岡英一
136	噫北方領土	永井時夫
139	長崎大水害に際しお見舞金贈呈の件	事務局
140	岡山ハルビン会々則	事務局
141	保険による会の基金への協力者芳名簿	事務局
142	あとがき	編集委員一同
143	会員名簿	
150	役員名簿	
151	客員名簿	
152	本会に御支援下さった方の御芳名	
157	募金収支明細表	
158	会計報告、6号誌収支決算書	
159	旧満洲国全図 (昭、二〇年現在)	

vol.9 (1984年11月発行)		
頁	記事名	筆者

	目次	
1	まえがき	会長
2	岡山ハルビン会設立の趣旨	
3	岡山ハルビン会年表	
6	岡山ハルビン会第十回年次総会報告	稗田良夫
7	岡山ハルビン会第十回年次総会会長挨拶	村岡英一
9	第七回全国ハルビン会岡山大会	
10	昭和五十八年三月十一日官報の一部記載	
12	岡山ハルビン会によせて	平沼赳夫
12	岡山ハルビン会によせて	松本一
13	終戦 詔勅	
14	幻の都、ハルビン案内	下里猛
31	中国残留孤児救援街頭募金報告	杉山清太郎
33	津山地区に於ける第二次街頭募金の報告	杉山清太郎
35	中国残留日本人孤児問題に思う (続)	椋代孝
40	橋のない河 (続)	平松民恵
48	人生の黄昏に想ふ	大高武夫
54	全国ハルビン会に思う	谷口栄治
55	スターリンの泣き面	猪木金人
58	懐かしいハルビン時代	石原常雄
61	わたしがハルビンに住んでいたころの白系ロシヤ人とソ連軍 将校の親切	中島達二
68	満州辺境の点描	数枝木寛
70	五丁の小銃	善木武夫
74	思い出は泉の如く	正宗武男
77	残留孤児になったかもしれない	石破ますみ
78	世相談義	稗田良夫
81	義勇軍訓練生の終焉	竹内幸郎
89	クアラムプール・シンガポールの旅	小野展毅
95	めぐり逢い	甲谷和代
96	第五次来日孤児歓迎の事ども	島岡利導
97	ニュース	郡司彦

99	昭和 59 年度岡山県帰国者友の会自立更生研修会参加	村岡英一
100	全国ハルビン会岡山大会開催さる	
103	一片のはがき	村岡英一
104	謝意表明	村岡英一
105	岡山ハルビン会々則	
106	あとがき	田辺三郎
107	会員・役員・客員名簿	
116	会計報告	
117	全国ハルビン会岡山大会収支	
118	募金勘定入出金明細表	
122	保険による会の基金への協力者名簿	
123	旧満州国全図	
124	残留孤児救援 協賛広告	

vol. 10 (1985 年 11 月発行)		
頁	記事名	筆者
1	目次	
3	岡山ハルビン会設立の趣旨	
4	岡山ハルビン会年表	
8	岡山ハルビン会第十一年次総会報告	椋代孝
9	岡山ハルビン会創立十一年次総会挨拶	村岡英一
10	十一年の歩みと今後の岡山ハルビン会	村岡英一
27	回顧（北満からの引揚を想う）	佐上静夫
33	中国残留孤児（高見氏親子）帰国後の活動状況について	大高武夫
36	「帰国者友の会」に招かれて	山本雄吉
37	出逢	杉本保之助
43	中国残留孤児の生まれし原因と将来	山本壽雄
46	満洲二十年間の思い出と体験	佐能静子
47	満鉄の主要駅にあった思い出の「スタンプ」	金井喜美
50	或る戦争未亡人からの手紙と姚慧彬さんからの便り	大高武夫
59	奇遇	中郷三己枝
72	記憶ちがい	谷口栄治

72	思い出の哈爾濱	片岡靖子
74	満洲時代の思い出	小西方一
74	師走の街頭に立って	林義正
75	ソ連引揚者四十周年全国大会に向けて	猪木金人
76	大地血に染む磨刀石（世界日報紙上の一部）	立岡皓男氏提供
78	満洲辺境の点描	数枝木寛
80	あれから四十年	小野きく恵
83	中国思い出の旅を終えて	横山斧吉
84	終戦後引揚げまでの私の体験	国府賀年生
86	残留孤児訪問記	鳥岡利導
89	李鵬さん、こんにちは	方尾正子
90	随想	永井時夫
91	漢詩日記	山本雄吉
101	世相談義	稗田良夫
102	岡山県指定の天然記念物「宗堂桜」について	笹埜二郎
104	孫呉慕情	平松民恵
105	香港にて深圳を想う	杉山清太郎
108	日中友好青少年サマーキャンプに参加して	大高武夫
112	立ち小便	林義正
113	永住帰国した残留孤児を招いて納涼の夕	椋代孝
114	岡山ハルビン会会則	
115	あとがき	田辺三郎
116	会員名簿	
124	会計報告	
125	募金勘定人出金明細表	
138	旧満州国全図	
139	残留孤児救援 協賛広告	

vol. 11 (1986年11月発行)		
頁	記事名	筆者
1	目次	
3	岡山ハルビン会設立の趣旨	

4	岡山ハルビン会年表	
9	岡山ハルビン会第十二回年次総会報告	椋代孝
10	中国残留孤児援護基金協会理事坂口氏よりの御便り	杉山清太郎
10	北満の曠野に眠る吾子を偲んで	那須道子
20	残留孤児に馳せる思い	小西方一
20	随想	大高武夫
30	随想 娘と私の再会	猪木金人
31	御伽噺	中郷三己枝
34	思い出は泉の如く（其の三）	正宗武男
36	残留孤児に想ふ	鳥岡利導
37	母の眠るチチハルをたずねて	片尾正子
41	「随想」 梅輯線の思い出と好太王碑	杉山清太郎
45	懐しの中国七虎力再訪の旅	小野菊恵
51	北海紀行－北方領土奪還を夢見て－	村岡英一
62	犀星とハルビン	谷口栄治
63	五十五年の歩みと中国旅行	山本寿雄
67	悲喜交々の七虎力訪問	藤原武志
68	訪華四方八方の記	林義正
72	中国思い出の旅に参加して	尾原繁
76	今日この頃の心境	笹埜二郎
76	「齢」七十六歳の盛夏に想う	田辺三郎
79	満鉄新入社員の便り	数枝木寛
80	随想	佐上静夫
81	随想 中国詩人の白楽天のこと	佐上静夫
83	引揚当時の思い出	片岡靖子
84	岡山ハルビン会会則	
85	あとがき	田辺三郎
86	会員名簿	
94	60年度会計報告	
95	募金勘定入出金明細表	
110	当初よりの募金収支明細表	
113	旧満州地図	

115	残留孤児救援 協賛広告	
-----	-------------	--

vol. 12 (1987年11月発行)		
頁	記事名	筆者
2	会設立の趣旨	
3	会則	
3	会の年表	
8	第十三回年次総会報告	村岡英一
10	昭和六十一年度会計報告	尾原繁
14	中国残留孤児救援募金活動末記	村岡英一
18	孤児救済のバザー	苫田郡鏡野町
11	昭和六十一年度募金入出金報告	尾原繁
19	故人と語る	村岡英一
36	試行錯誤の時代	岩崎健亶
40	ハルビンの思い出	杉本保之助
46	錬成道場白菊塾の思い出	杉山清太郎
47	敏子との結婚	藤原武志
50	ある大学教授の敗戦日記	大高武夫
59	敗戦後のハルビン生活	杉本保之助
64	その時私は	杉山清太郎
66	マンドリン銃	中郷三己枝
69	兵どもの夢のあと	中郷三己枝
71	敗戦後の新京で(一)	那須道子
73	敗戦後の新京で(二)	那須道子
76	神の加護(一)	藤原武志
78	食べそこなったオトウフ	片岡靖子
79	戦後満州逆上陸潜行記	杉田昇
83	難民救済に挺身した二人	滝川游軒
88	遙かなる母国の民よ	山本寿雄
91	ゴエン	片尾正子
95	引揚後の私(一)	佐上静夫
96	シベリヤ抑留画展	椋代孝

99	孤児達に想う	島田利導
100	孤児に一時帰国の夢を	小西方一
100	戦争のない世の中を	稗田千代子
101	特攻隊	林義正
102	若き日の友情	猪木金人
102	エジプト・フランスの旅	田辺三郎
105	旧婚旅行	山本雄吉
107	掃墓	酒井義雄
109	夏に思う	数枝木寛
112	悠久の大地	岡崎嘉平太
113	ふりかえると見えるもの	山際満寿一
114	満州における民族の興亡（一）	
114	歴史以前から清王朝の成立まで	
118	ハルビン（一）	
118	その歴史	
121	ハルビン市街図	
124	ごあいさつ	村岡英一
125	編集を終えて	椋代孝
126	会員名簿	
	協賛広告	

vol. 13（1988年11月発行）		
頁	記事名	筆者
	目次	
2	岡山ハルビン会設立の趣旨	
3	岡山ハルビン会会則	
3	岡山ハルビン会年表	
9	昭和62年度会計報告	
10	会長の交代について	村岡英一
13	生けるゆいごん	村岡英一
20	「北方四島」地図ミッション訪欧記	木村睦男
24	北方領土地図ミッション・木村睦男団長に聞く	池田進治

30	ハルビンの思い出（二）	杉本保之助
38	ハルビンの思い出（三）	杉本保之助
49	奉山線の複線化突貫工事	数枝木寛
51	兄の死	杉山清太郎
58	監視兵	中郷三己枝
60	敗戦後のハルビン生活（二）	杉本保之助
68	ハルビンからの引揚	杉本保之助
75	内地に帰るまではと耐えた日々	片岡靖子
76	「鉄西」での思い出	那須道子
77	コスモス	尾原繁
78	私の記録	竹内幸郎
82	シルクロードを旅して	山本寿雄
86	国際交流サマーキャンプに参加して。	片尾正子
87	エジプトの歴史を撮る移動研究室	田辺三郎
91	うっかり騒動二題	那須道子
94	暮らしの中に安らぎを	大高武夫
94	シベリヤ抑留画展	椋代孝
100	坂口遼氏の死を悼む	杉山清太郎
104	満州における民族の興亡（二）	
106	ハルビン（二）	
111	会員名簿	
	協賛広告	

vol. 14（1989年11月発行）		
頁	記事名	筆者
2	岡山ハルビン会設立の趣旨	
3	岡山ハルビン会会則	
3	岡山ハルビン会年表	
9	平成元年度会計報告	
10	会長交替について	数枝木寛
10	その後の動静ご報告	村岡英一
12	本誌前号（昭和六十三年度版）の正誤	

14	ハルビンの思い出（四） 栄光時代	杉本保之助
35	ハルビンの思い出（五） 栄光時代	杉本保之助
52	激動の青年時代	田辺三郎
54	機会	中郷三己枝
56	軍用貨車	中郷三己枝
57	ハルビンの惨状	田中多七
58	死線を越えて	立岡皓男
63	戦後八年を中国に生きて（一）	堀民雄
66	昭和時代を偲ぶ	数枝木寛
72	木村元参院議長を慰労する会に出席して	杉山清太郎
73	雑感	長尾喜久治
76	「我が心のハルビン」の自費出版	大高武夫
79	お寺の庭掃除	那須道子
81	私の思い	小西方一
82	きらめく北斗星の下に	椋代孝
88	満州における民族の興亡（三）	
90	満州における民族の興亡（四）	
90	日露戦争と満州の荒廃	
97	ハルビン三つの話	浜野健三郎
99	哈爾濱ニ於ケル救済資金、寄託金借入募集ニ関スル経緯	哈爾濱日本人民会
107	昭和13年（康德5年）元旦新年名刺交換会名簿	哈爾濱日本人民会
108	会員名簿	
	協賛広告	

vol. 15（1990年11月発行）		
頁	記事名	筆者
	目次	
2	岡山ハルビン会設立の趣旨	
3	岡山ハルビン会会則	
3	岡山ハルビン会役員名簿	
4	岡山ハルビン会年表（平成元年度）	
4	（財）中国残留孤児援護基金からの礼状	

5	山陽新聞夕刊（平成二、二、二十付）記事	
6	平成2年度会計報告	
7	ハルビンの思い出（六） 栄光時代	杉本保之助
28	チチハル	中郷三己枝
31	戦後八年を中国に生きて（二）	堀民雄
34	「老万会」の友の思い出	杉山清太郎
38	終戦の日に思う	数枝木寛
38	中国から帰った家族	
42	百働会について	大高武夫
46	満洲における民族の興亡（四）	
51	開拓団	堀川正三郎・大林作三
53	ハルビン市商店街復元地図	杉本公子
63	会員名簿	
	協賛広告	

vol. 16（1991年11月発行）		
頁	記事名	筆者
	目次	
2	岡山ハルビン会設立の趣旨	
3	岡山ハルビン会会則	
3	岡山ハルビン会役員名簿	
4	岡山ハルビン会年表（平成二年度）	
5	山陽新聞記事（平成二年十二月十三日夕刊）・中国孤児救護 訴え募金	
7	平成2年度会計報告	
10	ハルビンの思い出（七）	杉本保之助
24	関特演（関東軍特別大演習）	島田俊孝
29	満州点描	数枝木寛
32	戦場の空に浮かぶ母の顔	立関皓男
33	小盗児小孩	中御三己枝
43	戦後八年を中国に生きて（三）	堀民雄
47	朝鮮戦争	平松茂雄

50	生きていたイツム	竹内幸郎
51	復員余話	立関皓男
53	化粧クリーム奇談	林義正
54	満蒙開拓青少年義勇軍	
57	資料 引揚港「舞鶴」	舞鶴市
61	私の生い立ち	田辺三郎
64	満洲における民族の興亡（五）	
71	会員名簿	
	協賛広告	

vol. 17 (1992年11月発行)		
頁	記事名	筆者
	目次	
6	岡山ハルビン会設立の趣旨	
7	岡山ハルビン会会則	
7	岡山ハルビン会役員名簿	
8	岡山ハルビン会年表（平成三年度）	
9	山陽新聞記事（平成3.10.2）・岡山ハルビン会平成3年度総会写真	
10	厚生大臣感謝状贈呈式写真・帰国者友の会歓迎会写真	
11	平成3年度会計報告	
14	ハルビンの思い出（八）	杉本保之助
36	回想 満洲	堀田重忠
48	戦後八年を中国に生きて（四）	堀民雄
56	後勤要員としての女子挺身隊	藤沼清
57	シベリヤ抑留記	立岡皓男
64	中国残留孤児	細江信義
67	引揚記念館に思うこと	木船律也
68	愛国婦人会	八木稔
70	大同学院	藤川宥二
74	満洲における民族の興亡（六）	
78	会員名簿	

	協賛広告	
--	------	--

vol. 18 (1993年11月発行)		
頁	記事名	筆者
2	岡山ハルビン会設立の趣旨	
3	岡山ハルビン会会則	
3	岡山ハルビン会役員名簿	
4	岡山ハルビン年表 (平成四年度)	
6	平成4年度会計報告	
8	ハルビンの思い出 (九)	杉本保之助
26	回想 満州 (二)	堀田重忠
59	綏化から新京へ	那須道子
61	興南収容所 (北朝鮮)	中郷三己枝
64	戦後八年を中国に生きて (五)	堀民雄
68	シベリヤ抑留記 (二)	立岡皓男
74	「帰ってきたイツム」	竹内幸郎
76	我が心の「満州」を訪ねて	椋代孝
86	満州慢々の	西島武郎
94	満洲問題の歴史 (序文)	伊東六十次郎
99	会員名簿	
	協賛広告	
	奥付	

vol. 19 (1994年11月発行)		
頁	記事名	筆者
2	岡山ハルビン会設立の趣旨	
3	岡山ハルビン会会則	
3	岡山ハルビン会役員名簿 (平成二年度改選)	
4	岡山ハルビン会年表 (平成五年度)	
6	「中国残留婦人の帰国を実現する市民の会」義援金の報告	
7	平成6年4月2日 花見土曜会の報告	
8	田川&さとう宗幸 コンサートのお知らせ	

9	平成5年度会計報告	
12	ハルビンの思い出(一〇)	杉本保之助
30	北満「鶴岡」からの逃避行	那須道子
37	戦後のハルビン民留民	三上賢一
40	終戦時のハルビン	大門緑
41	卡子(チャーズ) 長春の飢餓地獄	遠藤誉
48	通化事件 「曠野の女将軍」から抜粋	中郷三己枝
73	通化事件 解説	池田皓
80	今こそ東京裁判を裁く時	
82	東京裁判を裁く	瀧川政次郎
100	満州事情	南満洲中等教育研究会
104	思い出の写真	杉本保之助
	協賛広告	
	奥付	

vol.20 (1995年11月発行)		
頁	記事名	筆者
2	岡山ハルビン会	
2	岡山ハルビン会設立の趣旨	
4	岡山ハルビン会会則	
5	岡山ハルビン会年表	
12	平成6年度年表	
13	写真3枚	
14	平成6年度会計報告	
15	平成六年度役員名簿	
15	会員名簿	
22	八十余年の我が生涯	杉本保之助
35	母さん、ありがとう	那須道子
36	死線を越えて	吉崎省子
53	ああ、遥かなり「牡丹江」	立岡皓男
68	必救一念石	椋代孝
70	年譜「引揚運動の父 大木英一 翁」	

73	朝鮮人従軍慰安婦問題に関するマスコミの報道について	棕代孝
78	大東亜戦争の原因と経過	鄭春河
91	太陽を背にして	佐藤和男
94	「真珠を捨てた豚」にならないために	名越二荒之助
98	戦後のアジア	ジョン・トーランド
99	台湾 高砂義勇隊	門脇朝秀
106	総目次	
121	廃刊の言葉	棕代孝
	協賛広告	
	奥付	

岡山ハルビン会調査記

菅野智博

はじめに

本稿は「満洲の記憶」研究会が実施した、故立岡皓男氏（1924—2012年）所蔵の岡山ハルビン会（既に解散）関連史資料の調査及び整理の成果である。岡山ハルビン会とは、岡山県に在住するハルビンからの引揚者によって結成された団体である。本稿では、まず調査の経緯について紹介した上で、岡山ハルビン会の活動を概観し、故立岡氏所蔵関連史資料の価値について検討する。なお、本号掲載の「故立岡皓男氏所蔵資料目録」及び『わが心のハルビン』記事目録も併せて参照されたい。

1 調査の経緯

まず本調査に至った経緯を簡単に述べよう。本研究会はこれまでに様々な史資料の収集や整理、保存作業を進めており、その中でも特に各帰国邦人団体が発行してきた会報や会誌の収集に力を注いできた⁽¹⁾。2013年7月、本研究会の設立に先立って有志が国会図書館において関連史資料の調査を実施し、その際に岡山ハルビン会が発行していた会報『思い出と消息』（第1—11号、1977—1986年）と

『わが心のハルビン』（第12—20号、1987—1995年）を閲覧した。同会報には、大変豊富な内容が収録されており、毎号が冊子の形式で丁寧に製本されている。筆者は、会報に記載された情報をたよりに、岡山ハルビン会の中心的な存在であった故立岡氏のご家族と連絡をとることができた⁽²⁾。そして、2013年12月に故立岡氏のご息女である立岡洋子氏と、ご令孫の立岡海人氏を訪問し、関連史資料の所蔵状況に関する予備調査を行った。また2014年12月に再訪し、立岡洋子、立岡海人両氏の同意を得て史資料を借り受けた。

2 岡山ハルビン会の活動

次に岡山ハルビン会の活動について概述する⁽³⁾。同会の活動は1974年10月10日、岡山市内の蓮昌寺において開催された設立総会から始まった。設立当初の会員数は30名であったが、1977年から解散直前の1995年までは常時100名以上（最盛期には約170名）の会員が所属していた。主な活動内容は、相互の消息確認や会報・体験記の出版、北方領土返還要求運動、ハルビン地域における遺骨収集・墓参などであった。

同会の活動の中でも特筆すべきものは、中国残留日本人に対する支援活動である。日中国交正常化以降に多くの帰国邦人団体が中国との交流を進め、それと同時に中国残留日本人への支援を開始した⁽⁴⁾。岡山ハルビン会は、1980年5月からほぼ毎年街頭募金を実施してきた。同会の記録によれば、1981年には約32万円、1982年には約31万円、1983年には約62万円を募ることができた⁽⁵⁾。集められた支援金は、一部が慰問金として活用されたほか、その多くは財団法人中国残留日本人孤児援護基金に寄付された。同会による残留日本人の支援は街頭募金にとどまらず、肉親捜しや訪中調査、身元引受け、来日孤児歓迎会など多様な活動を行ってきた。これらの活動は厚生省から表彰を受け、しばしば感謝状が授与された。



1983年2月岡山ハルビン会による中国
残留日本人救援募金活動
(故立岡皓男氏所蔵)

3 所蔵史資料の価値

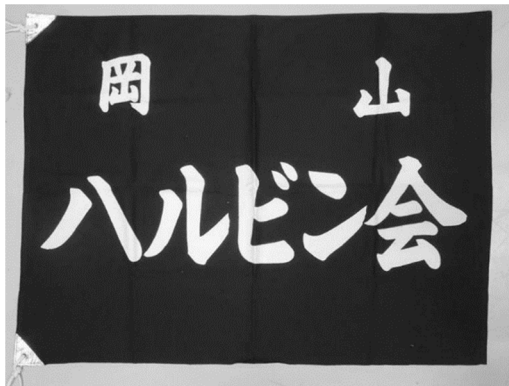
最後に故立岡氏の所蔵史資料の価値について検討してみたい。所蔵史資料は、大きく岡山ハルビン会に関連するものと故立岡氏自身のものの2種類に分けられる。ここでは、これらの史資料をさらにいくつかの種類に分類し、紹介すると共にその価値について述べる。

第1に、岡山ハルビン会をはじめとする各帰国邦人団体の会報である。岡山ハルビン会はもちろん、石頭会（関東歩兵石頭予備士官学校）、満洲電業会、ラーゲル・キリトマ会（ソ連抑留関連）など、故立岡氏が参加した各団体の会報や関連史資料が所蔵されている。また、各会から岡山ハルビン会に寄贈されたと推測される会報も多数含まれている。これらの会報の多くは、国会図書館にも所蔵されていない貴重なものである。

第2に、書籍や冊子、手稿などの回想録・体験記である。その中でも特に重要と考えられるのは、入手が困難な私家版回想録や未発表の手稿であろう。手稿にはおそらく会報に掲載される前の草稿や未掲載の原稿などが含まれていると考えられる。今後、会報と対照しながらさらに整理していく必要があるが、いずれにしても重要な資料であることには違いない⁽⁶⁾。

第3に、そのほかのアルバムや書簡、各会会員名簿、モノ資料などの史資料である。「岡山ハルビン会の歩み」と題したアルバムは数冊所蔵されており、その中

には同会がこれまで行ってきた募金活動や親睦会などの写真が収録されている。また、モノ資料としては山口淑子氏寄贈の色紙や、各会の会旗・法被、募金箱などが保存されている。これらの史資料は、同会の歩みやハルビン引揚者の戦後の活動を知る上で貴重なものであるといえよう。



岡山ハルビン会会旗（故立岡皓男氏所蔵）

(1) 「満洲の記憶」研究会が収集した会報やその史料価値については、佐藤仁史、湯川真樹江、菅野智博「關於満洲遣返日人団体的会報及其史料価値」（『暨南史学』第17期、2014年）や、佐藤量、新谷千布美、菅野智博、飯倉江里衣「帰国邦人団体の会報からみる満洲記憶」（『信濃』第67編第11号、2015年）で論じた。

(2) 故立岡氏が岡山ハルビン会の関連史資料を多数保管しているのは、故立岡氏経営の靴店が同会の事務局であったからである。

(3) 岡山ハルビン会の活動については、『わが心のハルビン』（第20号、1995年）を参照した。

(4) 例えば、大連会は1980年頃、数号にわたって同会の会報『大連会会報』に連絡先と離別時

結びにかえて

本研究会では、今後故立岡氏の所蔵史資料の整理・保存を進めると同時に、ほかの関連団体（東京ハルビン会、石頭会など）の史資料の収集も行う予定である。その上で故立岡氏個人のライフストーリーや、彼が主宰した岡山ハルビン会の性質などについて分析していきたいと考える。

最後に、調査や史資料の整理にあたって様々な面にわたり懇切丁寧な対応を賜った立岡洋子氏と立岡海人氏に衷心の謝意を示したい。

の状況などが本人の写真と共に紹介されている。佐藤、湯川、菅野掲掲「關於満洲遣返日人団体的会報及其史料価値」。

(5) 1981年の募金期間は12日間、1982年の募金期間は19日間、1983年の募金期間は10日間であった。なお、1983年の募金額が多いのは、約40名のボーイスカウト（1日のみ）の協力を得たからである。「岡山ハルビン会年表」『わが心のハルビン』第20号、1995年。

(6) なお、手記や回想録を手がかりにハルビン引揚者の敗戦後の「満洲体験」を描いたものとして、上田貴子「哈爾濱の日本人——1945年8月—1946年9月」（山本有造編著『満洲——記憶と歴史』京都大学出版会、2007年）がある。

中国黒龍江省鶴崗市調査記

佐藤量



中国東北部と鶴崗市
(作成者：大野絢也)

1 炭鉱都市鶴崗と日本人

2015年8月19～21日にかけて、中国黒龍江省鶴崗市でフィールド調査を行った。調査参加者は本研究会メンバーである筆者と菅野智博である。鶴崗市は中国東北地方のなかでも北方に位置しており、ロシア国境にも近い都市である。今回の調査では、長春からジャムスまで寝台列車で11時間、ジャムスからバスで2時間移動して鶴崗市に向かった。炭鉱都市と

して知られている鶴崗は、のどかで落ち着いた都市であった。

鶴崗には、かつて多くの日本人が暮らしていた。「満洲国」(以下「」省略)期には日本による炭鉱開発が進められ、満洲国のなかでも有数の規模を誇っていた。戦後も引き続き鶴崗の石炭は重宝され、中国经济発展の礎となった。もっとも昨今は東北経済の落ち込みと石炭需要の減少から、いささか活気が薄らいでいるようであった。中国の街路では、真夏の夕暮れ時に人びとが涼む光景をよく目にするが、鶴崗では人影がまばらだったことが印象的である。鶴崗市内に大学はなく、若者の多くは近隣のジャムスやハルビンに出ていくという。また、市内を歩いても満洲国時代の痕跡が声高に表象されているわけでもなく、何も知らなければかつて日本人が暮らしていたことは想像できないだろう。

私たちが鶴崗を知ることになったのは、ここで長年暮らした西田瑠美子さんとの出会いがきっかけである。西田さんと本研究会のつながりは2011年に遡る。2011年の年末から2012年にかけて、本研究会のアドバイザーである一橋大学教授佐藤

仁史先生と、そのゼミ生である菅野智博、森巧が計 6 回にわたって西田さんにインタビューを実施した⁽¹⁾。その際の計 12 時間に及ぶインタビュー記録は、今後「西田瑠美子氏口述記録」としてまとめる予定であるが、その経歴は非常に興味深い。西田さんは、戦前に農業移民として渡満し、戦後は紆余曲折を経て中国に残留して中国籍を取得され、家族とともに鶴崗で暮らした。そして 1980 年代以降は拠点を日本に移し、中国帰国者の支援活動に参加されている。今回の鶴崗調査では、西田さんご本人とご家族にも同行いただいて、鶴崗市内を歩きながら西田さんのライフストーリーをたどった。

2 西田瑠美子さんの経歴

西田瑠美子さんは、1934 年福岡県若松市（現北九州市）に生まれた。敗戦直前の 1945 年 3 月に、先に満洲へ渡っていた姉たちを追って家族で移住した。満洲では黒龍江省通河県漂河屯に入るが、まもなく終戦を迎えた。その後西田さんはご家族と離れ、保母として中国各地の保育所を移動し、1951 年から鶴崗で暮らすことになる。鶴崗では炭鉱労働者の寮で寮母として働いていたが、翌年には職場の事務職員である中国人男性と 17 歳で結婚した。子どもができたことで鶴崗での定住生活が始まった。それまでにも日本に帰る機会があったが、家族ができたこともあって西田さんは中国に残ることを決断する。自分が日本に帰るためには、中

国人である夫や子どもを置いていかなければならず、家族全員で日本に帰国することができなかったからである。1950 年代に西田さんは「家族みんなで中国で生活するために」中国籍を取得した。

1960 年代から 70 年代にかけての文化大革命の時期にはたいへんな苦労を経験し、その影響は家族にも及んだ。日本人を妻に持つ夫は炭鉱で強制労働を強いられることもあった。苦難の時期を経た 1972 年の日中国交正常化以降、西田さんは日本への帰国を考えはじめるようになる。そして 1988 年に、西田さんは子ども二人とともに 43 年ぶりに日本へ帰国した。帰国を決断した背景には、文化大革命でのつらい体験が大きかったという。

西田さんは帰国後、中国帰国者の生活支援を目的とする「中国帰国者の会」に参加しはじめた。中国帰国者をめぐっては、日本語教育の不備や日本社会への適応など課題が多く、支援が必要な状況であった。多くの中国帰国者は、やっとの思いで帰国したもの、その後の生活は決して楽ではなかった。こうした状況を鑑みて、2001 年に残留婦人 2 人と国家賠償請求訴訟を起こし、中国帰国者の生活補償を訴えた。80 歳を越えた現在でも「中国帰国者の会」の活動に精力的に取り組んでいる。

3 苦労が染み込んだ鶴崗の家

今回の調査で私たちは、西田さん一家が 1950 年代以降長く暮らした鶴崗の家

を訪れた。西田さんは鶴崗に住んでいるときに何度か引っ越しを繰り返しているが、その理由は日本人であるということを知近所の人に知られることを恐れたからだそうだ。ときには洗濯物がなくなったり、子どもたちがいじめられたりしたこともあったという。西田さんの家は、炭鉱へと続くゆるやかな登り坂の途中にあった。周囲の家々も古く、もう何年も手入れされていない。「昔はこの辺の建物も新しく、もっときれいだったんだけどね」と西田さんは言う。途中で道を尋ねた高齢の女性は、偶然にも西田さん家族のことを知っており、久しぶりの再会を喜んでた。



旧居周辺の家並み

撮影日：2015年8月21日

撮影者：佐藤量

西田さんが暮らした家は、増築され現在でも住居として使用されていた。現在の住人に経緯を話すと、我々も含めて快く家のなかに入れてくれた。家の門を入ると、当時はなかった倉庫が増築されて

おり、中庭ではアヒルや鶏が飼育され、小さな畑や井戸もあった。現在の住人は夫婦2人暮らしのようだ。近所の人びとも何人か集まってきて、西田さんの元気な姿を見て喜んでた。近所の住人が西田さんと語りあい、最後まで私たちを見送ってくれたことが印象的であった。

しかし、彼らと別れてから西田さんに再訪の感想を聞いたところ、意外な答えが返ってきた。

[再訪してみて]うれしいというより、悲しいですよ。こんなに変わったんだ、人も家もこんなにぼろぼろになったんだって。家の庭もなんでも。あの家で暮らしている人たちは40代か50代かな、みんな生活が苦しいからね。自給自足に近いかもしれない。病気になったらたくさんお金がかかる。老後のことを考えても貯金をしなければいけない。冬は寒い生活は楽じゃない。生きていかなければいけないから、貧しいけどみんな必死ですよ。

西田さんの口から出た感想は、昔の思い出や旧知の人びとと再会したうれしさではなく、現在の住人の生活苦についてであった。とくに、貧しさ、必死さという言葉が強調されていた。それは戦後に中国籍を取得されて、中国人としてこの地で生き抜いてきた西田さんであればこそその視点といえるだろう。西田さんにとって、久しぶりに再訪した家は、自分自身

だけでなく現在の住人にとっても苦勞の場所だと感じられたのかもしれない。



旧居前に立つ西田さん
撮影日：2015年8月21日
撮影者：佐藤量

4 調査を終えて

今回の調査でもっとも印象深かった出来事は、旧居を再訪したときの西田さんのまなざしに触れたことである。鶴崗の家を再訪しながら昔のことを語る西田さんのまなざしは、懐かしさやノスタルジアといった過去の出来事に対してではなく、今でもそこに暮らす人びとに向けられていた。

戦前中国で暮らした日本人にとって、かつて自分が暮らした家を再訪することは楽しみのひとつであった⁽²⁾。とりわけ、大連や長春（旧新京）、瀋陽（旧奉天）など、満洲都市部で暮らした日本人に顕著

であり、なかには同窓会などで団体旅行を企画して再訪するケースもある。他方で、もう中国には行かないと心に決めている人も少なくない。変わり果てたという現状を知りたくない、つらく過酷な逃避行の経験を思い出したくないという思いからである。しかし西田さんの視点はそれらとは異なり、現在の鶴崗で暮らす人びとの生活に向けられていた。日本というよりは、中国からのまなざしに近いといえるかもしれない。

今回の調査では、複眼的な視点を意識することの重要性を西田さんから学ぶことができた。「満洲の記憶」を考えていく上で、かつて満洲国であった場所が現在どうなっているのか、そしてそこに暮らす人びとがどのような生活を送っているのかという点もあわせて考えていきたい。

(1) 2013年には、本研究会が主催した講演会「『中国帰国邦人』—私たちは歴史の中に生きている—」に西田さんをお招きしてご講演いただいた。

(2) 戦後中国では、「敵性財産」としての日本人住宅を中国人に分配する住宅政策をとってきたこともあり、戦後建物がそのまま住居として使用されていることも多い。

満鉄留魂祭参加記

湯川真樹江

はじめに

「満洲の記憶」研究会では、これまで十数回満鉄会での史料調査を行ってきた。2015年5月、筆者は天野博之専務理事のご厚意により、最後の満鉄留魂祭に参加した。そこで本稿では満鉄会の活動と留魂碑の建立経緯を説明し、留魂祭の状況を報告する。

1 満鉄会の活動

まずは満鉄会について簡単に述べたい。満鉄会の前身は満鉄社友新生会で、満洲より引揚げてきた南満洲鉄道株式会社（以下、満鉄と略称）の旧社員らによって1946年に結成された。当初は旧社員および家族の更生や残留社員の引揚げ促進などを目的に活動しており、帰還した人々の把握が進んでからは、名簿（氏名、居住地、旧職名など）が作成されるようになった。1954年には財団法人満鉄会の設置が認可され、満鉄社友新生会は満鉄会とその名を変更した。また旧社員であった安井謙や永末英一らが国会議員に当選すると、旧満鉄社員の債権確保や米国会議会図書館所蔵の満鉄資料返還交渉が進展した。満鉄会ではそのほかにも旧重役社員の葬儀や会員バッジの記念品配布などの文化活動を主催し、日中国交回復以

降は大連や瀋陽などを訪問するツアーも開催するようになった。

2 満鉄留魂碑の建立経緯

満鉄留魂碑が建立されたのは、旧満鉄社員の戦後補償業務がひと段落した頃である。1979年3月に大阪満鉄会会長の小味淵肇は「満鉄社員顕彰碑」の建立を提案し、その後、理事会によって可決された。満鉄会は佐藤晴雄理事長らをメンバーに建築小委員会を結成し建立候補地の視察を進めたが、その中で有力な候補地となったのは、下関にある大連神社（赤間神宮境内）であった。大連神社は戦前に大連にあり、戦後の混乱期に水野久直宮司がご神体を持って帰還したという経緯を有していた。また下関は満洲につながる玄関口でもあった。そのため、建立地の選定は比較的順調に進んでいったようである。当初、水野宮司も積極的な姿勢を見せていたが、留魂碑のデザインをめぐる意見の衝突が起きたために、大連神社での建立案は白紙となった。決裂後、建築小委員会では富士山麓の富士霊園と比叡山の夢見ヶ丘を候補地に挙げていたが、富士霊園は安井謙（当時は参議院議長を退任後）らの関係する財団法人であったことと、多くの旧満鉄社員が眠

っていたことによりこの地に決められた。

富士霊園では建築に制限が加えられていたために、建築小委員会は新たにデザインを練り直した。留魂碑デザインは幾多の変遷がみられたが、結果的には①富士霊園の「清らかな環境」を維持し、②石碑は「五つの石の魂を一体」にしながら「大満鉄の多種多様な仕事の部門が一体的」となって強い躍動感を表し、③周辺にはベンチを備え付け、人と魂、魂と魂の「対話の場」を設けること等が決められた⁽¹⁾。

1982年4月14日には竣工式が明治神宮司祭のもとに行われ、900余名もの人々が参加した。満鉄留魂碑は55団体約8080名からの寄付金（約8900万円）によって建立され、格納庫には社員録（漢人、朝鮮人等を含む）、殉職社員芳名簿、満鉄社旗などが収められた。そして満鉄留魂祭は毎年5月に開催されることとなった。

3 最後の満鉄留魂祭

前述の通り筆者が参加したのは最後の満鉄留魂祭（第35回）である。満鉄会が2016年3月に解散されるに伴い、最後の式典となった。当日は五月晴れの清々しい天候で、新緑の美しい景観が目目を引いた（写真1）。午前11時30分に富士霊園事務所に集合の後、留魂碑前まで移動した。式典プログラムは以下の通りである（カッコ内は担当した人物）。



写真1 満鉄留魂碑

撮影日：2015年5月15日

撮影者：湯川真樹江



写真2 直会の様子

撮影日：2015年5月15日

撮影者：湯川真樹江

11：45 式典開始

開始挨拶・司会（天野博之専務理事）

11：50 物故社員および関係者に黙祷

11：55 祭詞奏上（松岡満壽男理事長）

12：00 「満鉄社歌」斉唱

12：10 献花・写真撮影

12：30 「北はアムール」斉唱

留魂祭のはじめには、天野専務理事が式典の始まりを告げ、物故社員および関係者に黙祷した。その後、松岡理事長による祭詞が奏上され、「満鉄社歌」を斉唱した。参加者は一人ずつ主碑の前に向かい白菊を手向け、記念撮影を行った。当日の参加者リストをみると、一世は16名、その子供である二世は17名、三世およびその他関係者は10名であった。参加者の顔触れを見ると80代が中心で、会員の高齢化を実感した。参加者の多くが二世やその他関係者で、彼らのほとんどは満洲で幼少期を過ごしていたために「満鉄社歌」、「北はアムール」等の歌を知っている人は多くなかった。同様に、若い世代がかつて大連神社敷地内での留魂碑建立計画があったことを知る人も少ないと思われた。

式典の後、富士霊園事務所にて直会が開催された。直会では和風御膳が供えられ、参加者は各自付近の参加者と談笑した(写真2)。筆者は二世会員のそばに着席したが、そこでの会話は出身地や卒業した小学校の話題が中心であった。お互いに初対面の人が多く、それぞれ満洲とのつながりを話していた。会の最後には再び「北はアムール」を斉唱し、お土産として松岡洋右の書と饅頭が手渡された⁽²⁾。直会はなごやかな雰囲気うちに終了した。

結びにかえて

筆者は満鉄留魂祭に参加して、旧満鉄社員の間で共有されていた経験が、二世、三世と世代が下っていくにつれて薄まっていたことを実感した。満鉄留魂碑関係史料や『満鉄会報』には一世会員の満鉄への思いが強く現れており、幾多の衝突が生じたことも納得できる。二世、三世の満鉄に対する思いは一世のそれとはやや異なり、独自の価値観を有しているようにみえた。全体として若者の数は少なく、彼らの中で満鉄アイデンティティを体感的に共有することが難しかったことが、戦後70年を経て満鉄会が解散する一つの契機になったと思われる。会の解散は筆者も一抹の寂しさを覚えるが、満鉄会が各時期に行ってきた活動を記憶にとどめ、今後も調査と分析をしていく予定である。史料の提供および留魂祭への参加を許可してくださった天野専務理事にはこの場を借りてお礼申し上げたい。

(1) 財団法人満鉄会『満鉄会報』141号、1982年5月31日、3頁。

(2) 松岡洋右の書は吉田松陰の「至誠の書」に因んで、「至誠亦不動者未之有也」と記された(複製)。

2015 年度秋季大会報告要旨

「満洲の記憶」研究会は、2016年3月5日に書評会として、2015年度秋季大会を早稲田大学早稲田キャンパスにて開催した。今回は、第1書評として梅村卓氏著の書籍『中国共産党のメディアとプロパガンダ——戦後満洲・東北地域の歴史的展開』（御茶の水書房、2015年）を取り上げ、鈴木航氏に書評していただいた。続けて第2書評として朴敬玉氏著の書籍

『近代中国東北地域の朝鮮人移民と農業』（御茶の水書房、2015年）を取り上げ、湯川真樹江氏に書評していただいた。当大会では約30名の方々に参加していただき、各書評とその後の討論において多くの貴重な指摘や意見があり、議論が大いに盛り上がるなど、所期の目的を達成できた。

第1書評

鈴木航（文教大学非常勤講師）「報告概要」

梅村卓氏の博士論文をもとにした同書は、第二次世界大戦終結から中華人民共和国成立へいたる中国共産党史をメディアと宣伝の側面から問い直そうとしたものである。近年、満洲国崩壊後の中国東北地域の帰趨を、1949年革命にいたる流れのなかで考察する「戦後満洲」史研究が進められており、副題に「戦後満洲・東北地域」を掲げる本書もこの流れに位置づけられる。本報告はこれを中国メディア史の視点から検討した。

第1章は、戦後東北の国際関係と宣伝戦略の変化を分析し、全体の見取り図的な位置にある。第2章では通信社と活字

メディアの基盤形成が取り上げられる。通信員制度によって広範な地域から情報を収集するネットワークを築き、さらに「読報組」と呼ばれた読み聞かせ集団を通じて、共産党が大衆宣伝を拡大したことが示される。第3章は、ラジオ放送・映画・肖像画・年画・演劇などの「視聴覚メディア」の基盤形成をまとめる。満洲国時代から残留する日本人留用者のラジオ・映画における関与と同時に、共産党の非文字メディアの活用戦略を分析する。第4章は、第2、3章でみてきた各メディアを有機的に組み合わせた宣伝活動の実相を検討する。ここでは『東北日報』の風刺画、ラジオの対敵宣伝、記念日と殉死者の顕彰がとりあげられる。

全体を通じた特徴の第一は、多メディア——新聞、雑誌、伝単（ビラ）、年画、連環画など——による複合的戦略展開として共産党の宣伝活動をとらえたことである。第二は、上述の戦後満洲・東北地域という地域枠を押し出したことである。以上の二つを重要な視点として共産党のメディア宣伝が「満洲国の遺産」を継承していたことを解明し、それが人民共和国にもつらなるという「連続性」を示唆したことが本書の意義と成果である。

ただし、連続性というとき、東北地域における連続性だけでなく、延安から東北へと移動した共産党の政策的連続性の考

察も不可欠であろう。その点で、先行研究のある抗日戦争期の共産党文化政策の全体像が充分におさえられていないこと、中国全体のメディア史の参照が弱いことなどは課題といえる。そうした問題点をもちつつも、それほど多くない日本における中国メディア史の単著として共産党メディアの歴史的形成過程にせまった意義は小さくない。ここから、さらにこの分野の今後の研究の発展がうまれることを期待したい。なお、当日の議論も踏まえた同書についての書評を、別稿にて発表予定である。

第2書評

湯川真樹江（学習院大学国際研究教育機構 PD 共同研究員）「報告概要」

今回、評者が書評したのは朴敬玉著『近代中国東北地域における朝鮮人移民と農業』（御茶の水書房、2015年）である。本書は、朴氏が一橋大学に提出した博士学位請求論文をもとに編集・刊行したもので、とりわけ水田耕作の状況や土地の使用状況、朝鮮人を「保護」するために設置された安全農村での経営状況などを明らかにしている。

書評会にて評者は、本書がこれまで衣保中氏や金穎氏によって論じられてきた「朝鮮人貢献論」にとどまらない視点を提供したことを確認した。また、第二章で朴氏が20世紀前半の中国東北地方にお

ける水稻品種の伝播過程をより実証的に明らかにしたことを高く評価した。さらに、朴氏が現地調査を積極的に行い、1945年以降の朝鮮人と漢人との矛盾を指摘したことは、大きな成果であったといえよう。

一方で、本書の分析を1930年代までで区切るのではなく、1940年代も視野に入れる必要があったのではないかという疑問も残った。1930年代までは様々な制約を受けながらも朝鮮人が独自の文化をもたらしていたが、1940年代は「満洲国」で穀物の管理態勢が整い始め、統制が強化されて「供出」が行われていく時期であった。朴氏は本書にて朝鮮人をめぐる様々な条件を提示されたが、突き詰めて言えば「善良な朝鮮人が弾圧されながら

も伝統を守り、新品種を取り入れ稲作にいそむ姿（それに合わせて借金苦もある）」の朝鮮人像であり、そうした姿は従来の研究でも十分に示されてきた。そのため評者は、それとの差別化をはかるためにも朴氏が 1940 年代を分析して、新たな朝鮮人像を提示する必要があったのではなかったかと考える。

評者の疑問に対し、朴氏は 1940 年代の分析は今後の課題とし、とりわけ農村内

外の人的、金的関係を重点的に調査していくことを言明している。農村の内から外へ視野を広げていくという点については評者も賛同する。今回、書評会での全体討論が活発となったのは、何よりも本書が示唆に富む研究であったからと考える。今後は中国朝鮮族ならではの朴氏の行動力と視点を活かした研究が続々と生れることを期待してやまない。

2016 年度春季大会報告要旨

「満洲の記憶」研究会は、2016年7月23日に研究報告の場として、2016年度秋季大会を一橋大学国立キャンパスにて開催した。今回は、第1部として佐藤量氏著の書籍『戦後日中関係と同窓会』（彩流社、2016年）を取り上げ、坂部晶子氏と

佐藤仁史氏に書評していただいた。続けて第2部として細谷亨氏に研究報告をしていただいた。当大会では約40名の方々に参加していただき、多くの示唆に富むコメントがあり、意義深い討論が行われるなど、所期の目的を達成できた。

第1部

佐藤量（立命館大学・京都文教大学講師）
「自著『戦後日中関係と同窓会』の合評会を終えて」

2016年7月23日の「満洲の記憶」研究会春季例会（一橋大学）において、拙著『戦後日中関係と同窓会』の合評会が行われた。評者は坂部晶子氏（名古屋大学准教授、社会学）と佐藤仁史氏（一橋大学教授、中国近現代史）のお二人で、それぞれ社会学と歴史学の立場から評していただいた。

『戦後日中関係と同窓会』（彩流社、2016年）は、日本植民地期大連の日本人学校の同窓会を舞台に、卒業生である日本人と中国人の社会的交流を描いたものである。戦前日本は、中国各所に学校を設置しており、そこには日本人以外の学生も多数在学していた。彼らは同窓会を形成し、その人間関係は戦争が終わって

も継続した。本書では、この同窓会ネットワークに注目し、戦争を経験した日中両国において特殊にもみえるこの人間関係がどのようなものであり、そして中国人同窓生が反日的な戦後中国社会でどのように生活していったのかについて、当事者へのインタビュー調査と同窓会誌などの貴重な個人史料の分析を通して論じた。

坂部氏からの指摘は、戦後日本および中国における「満洲」に関するマスターナラティブ（公共の記憶）が、戦後社会を生きる人びとにいかに関与したかが論点となった。とりわけ中国人同窓生の語りのゆれや葛藤が、マスターナラティブと同窓会内部のモデルストーリーとの駆け引きのなかでいかに醸成されていったかという指摘は、本書で十分に議論を展開することができなかった点であった。今後さらなる考察の必要性を認識すること

ができた。

また佐藤氏からは、史料の扱い方について指摘があった。本書では書簡や日記、同窓会誌といった個人史料を駆使して民間レベルでの分析が行われている点に独自性がある一方で、それらの史料の位置づけについて指摘を受けた。本書の研究対象となっている人びとは、都市住民のなかでも上中層に分類される人びとであり、たとえば大連の商工業者層について

第2部

細谷亨（立命館大学経済学部准教授）「満洲移民史研究の現状と課題」

近年、満洲への日本人農業移民（以下、満洲移民）に関する歴史研究があらためて活発になっている。とくに1990年代以降は、体験者への聞き取り調査（口述資料）を通して、「満洲移民を体験したひとびとを満洲移民体験者として、彼らの人生を分析対象」とする「満洲移民研究」（蘭信三『「満洲移民」の歴史社会学』、行路社、1994など）が盛んになったが、その一方で、文字記録の読解・分析を中心とした歴史研究としての「満洲移民史研究」にも大きな変化がみられたことにも着目する必要がある。以上の問題意識から、本報告では、日本近現代史研究の諸潮流をふまえつつ、1950年代後半から現在までの満洲移民史研究の動向・論点を整理した。

研究動向については、①戦前・戦時期の満洲移民史像、②帝国崩壊・「人の還流」

は依然として検討の余地があることが示された。こうした階層や世代を意識しながら、さまざまな人びとの史料を集積していくことの重要性を学ぶことができた。

以上のように、本合評会を通して数多くの的確かつ重要な指摘をいただくことができた。評者をつとめていただいた坂部氏、佐藤氏には重ねてお礼申し上げたい。

と満洲移民の二つの視点から検討した。①では、1950年代後半から80年代にかけての研究は、地主的土地所有を内包する日本資本主義の矛盾や日本帝国主義史・「日本ファシズム」研究など主に「土地問題」との関わりで進められたこと、その一方で、体験者への聞き取りや日記分析など民衆史的関心をもっていたことを指摘した。90年代以降になると、国民国家論や総動員体制論の登場とも重なるかたちで、農村・村落からの「排除」をともなう満洲移民への動員の内実が大きな論点になった。

②では、90年代以降の新たな研究領域として引揚研究が登場したこと、帝国崩壊に伴う様々な移動するマイノリティの社会統合問題が焦点になったことを指摘した。とりわけ、ここでは引揚者の「包摂と排除」が重要な論点になっている。戦後開拓政策に表れるように農村社会の包摂の不十分さを強調するか、戦後行政村に

よる社会福祉行政の拡充や県外入植者への支援など母村の機能を強調するかで描かれる満洲移民の戦後史像は異なっている。報告では、引揚者と戦後日本社会の関係を問う際には、どちらか一方という評価ではなく、二つの局面を視野に入れながら、引揚げの時期や政策展開、行政村・集落・既存農家、「戦後開拓地」のあり方など複合する諸関係を具体的に明らかにすることで、引揚者の存在形態を歴史過程のなかに位置づけていくことの必要性を強調した。①・②ともに、近年、「地域」の視点からアプローチすることの重要性が高まってきているといえよう。

報告後の討論では、中国近現代史の立場から、中国地域社会と日本人移民の関

係性をうまくとらえきれていないなど、本報告をふくむこれまでの満洲移民史研究の問題点が指摘された。また、限界を内包しつつも中国社会を動的にとらえる視角をもっていた日本帝国主義史研究の豊富な成果を読み直すことの必要性も指摘され、あらためて研究史に立ち返ることの重要性を痛感することになった。満洲移民は、日本近現代史研究の知見をふまえるだけでなく、中国近現代史研究との対話を不可欠とする研究領域であることを強く認識させられた一日であった。貴重な報告の機会を与えて下さった「満洲の記憶」研究会に対して、この場を借りて御礼を申し上げたい。

寄贈資料目録

本目録には、2015年7月31日から2016年7月31日までに本研究会に寄贈していただいた資料を掲載しました。他にも貸与していただいた資料や写真、ハガキ、書簡、切抜も多くありますが、紙幅の関係上ここでは省略させていただきます。また、多数の資料を提供していただいた方の資料名は一部のみ（5冊まで）紹介させていただいております。

本研究会では皆様からいただいた資料をより多くの方々にご利用していただ

団体や個人が所蔵していた貴重な史資料を多数ご寄贈いただいた方を紹介させていただきます。紙幅上の関係により詳細な目録を省略させていただきます。

- ・天野博之氏（満鉄情報センター専務理事）
- ・江夏由樹氏（一橋大学名誉教授・帝京大学教授）
- ・金澤毅氏（大同学院二世の会会長）
- ・白柳弘幸氏（玉川大学教育博物館学芸員）
- ・田中亮氏（医師）

るように整理・保管し、ニューズレター発行の機会などを通じて順次公開していく予定であります。

本研究会に貴重な資料を寄贈・貸与していただいた方々には、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。また、今後も継続して資料の収集を行っていく所存ですので、御理解・御協力の程よろしくお願い申し上げます。

（50音順）

磯部荀子氏

- ・河合浩孝『日本張家口の会・年譜・簡略ヒストリー（池田満寿夫・ウランバートル・靖国神社）』私家版、2015年

一條美代子氏

- ・清水豊吉『俘虜追想記——シベリアからウズベクへ』北見文化連盟、1980年
- ・牡丹江高等女学校同窓会『祥林』第12号
- ・安部桃子『牡丹江高等女学校職員生徒——避難流浪記に寄せて』私家版、刊行年不明

猪伏昌三氏

- ・長澤政輝「延辺凶們いまむかし——嗚呼 豆満江！」(原稿)、刊行年不明
- ・藤原雅英『果てしなき山河に——終焉と黎明の鮮中ソ国境に行く』私家版、1977年
- ・太田正『満洲に残留を命ず』草思社、1984年
- ・『間島中学校』私家版、刊行年不明

牛嶋英俊氏

- ・近畿大学産業理工学部『かやのもり』第22号、2015年

上野京氏

- ・中国帰国者の会九州連合会・日本中国友好協会福岡連合会『中国残留日本人孤児18名による戦後七十年回億録』中国帰国者の会九州連合会・日本中国友好協会福岡連合会、2015年
- ・中島幼八『この生あるは——中国残留孤児がつづる』幼学堂、2015年

梅澤順子氏

- ・梅澤順子「戦争体験談」(講演原稿)、2011年
- ・日高恒義「日高明義関連資料」(自筆原稿)、刊行年不明

遠藤和子氏

- ・くろこつねお『故郷再訪——瀋陽回顧・私の少年時代』私家版、1989年
- ・くろこつねお『さようなら、思い出の

瀋陽、私の中国旅行記——最後の郷愁の旅 瀋陽・大連』私家版、1996年

- ・くろこつねお『わたしと中国残留日本人との交わり——まかり間違えば自分もそうになったかも知れない思い』私家版、2004年
- ・葵小学校同窓会『あふひ草』第36号
- ・奉天工業学校『天山』第24号

岡田和裕氏

- ・南満洲鉄道株式会社商工課編『満洲特産物取引指針』満蒙文化協会、1924年
- ・ソ聯大百科辞典版(大橋哲哉訳)『支那』白揚社、1937年
- ・電業社員会『電業』9月号、1942年
- ・シロコゴロフ(大間知篤三・戸田茂喜共訳)『満洲族の社会組織』刀江書院、1967年
- ・「満州と日本人」編集委員会編『満州と日本人』特別第2号、大湊書店、1977年

岡部滋氏

- ・大同学院二世の会『大同学院二世の会通信』第10号(最終号)

金田寛氏

- ・奉天第2中学校7期会『在満中学生の記録 我 動乱の時代に生きて』2004年
- ・増田芳雄『アジア民族の夢 満洲——日露戦争後の旅順と奉天』学会出版センター、2005年
- ・増田芳雄『大陸からの音—クラシック

音楽の中継地・満洲』近代文藝社、2014年

川上高義氏

・『82 才のクラスメートの集い——苦難の引揚船へ満州より』(DVD)、刊行年不明

川村みすず氏

・村上知行『北京の歴史』大阪屋号書店、1941年
・村上知行『北京十年』中央公論社、1942年
・今井弥吉『満洲難民行』築地書館、1980年
・清岡卓行『大連小景集』講談社、1983年
・武藤富男『私と満州国』文藝春秋、1988年

木下重助氏

・川崎忠昭『大連のうた——おとうさんの絵本』すばる書房、1978年

建国大学同窓会

・建国大学同窓会『建国大学同窓会報』第94号

島田大輔氏

・同徳会 2 期生会編『満州国軍官学校 2 期生の記録 朔風万里』同徳会 2 期生会、1981年

高橋健男氏

・高橋健男『満州開拓民悲史——碑が、土塊が、語りかける』批評社、2008年
・高橋健男『満州とは何だったのか——東京都満州開拓民の記録』ゆまに書房、2013年
・高橋健男『幻の松花部隊——若き義勇隊員たちの満州』文芸社、2011年
・高橋健男編『いくさ、あらずな——「レポート・アルロンシャン」と深田信四郎の願い』新潟日報事業社、2015年

高倉政子氏

・日本長春会終戦記録文集企画委員会編『新京・長春の記憶——子や孫に伝えよう戦争の悲惨さを』日本長春会、2009年

照井伸興氏

・牡丹江中学校同窓会『牡丹江中学校同窓会報 北晴』第7-10号

西川順芳氏

・西川順芳『七期の絆』第89-92号
・蘭星会『蘭星同徳』第22-24号

丹羽幸三氏

・客野耕正『少年が見た満州帝国』文芸社、2012年

古海建一氏

・『文芸春秋』第42巻第7号、文芸春秋社、1964年

- ・国際善隣協会『引揚 60 周年記録誌——いま後世に語り継ぐこと』2007 年

水本務氏

- ・源元一郎『昭和 20 年 8 月 17 日(康德 12 年、1945 年) 満洲のミラクル——民族協和・扎蘭屯』鳥影社、2015 年
- ・扎蘭屯小学校同窓会『扎蘭屯写真集——ロシアの古きよき香に満ちた思い出のわが故郷』2015 年

三宅肇氏

- ・「加藤完治先生の拓魂思想と満蒙開拓青少年義勇軍」(原稿)、1978 年
- ・安達明「留日学生ストライキのリーダーとして」(複写抜粋) 加藤完治全集刊行会『加藤完治先生逸話集下巻——150 人の綴った思い出』加藤完治全集刊行会事務局、刊行年不明

宮明正紀氏

- ・哈爾濱学院連絡所『アブローラ (ABPOPA)』第 31 号

則武国彦氏

- ・鮫島宗範『炎の軌跡——種子島・屋久島・枕崎・旅順・北京・金州・大連の回想』2016 年

村上節子氏

- ・増田芳雄『大陸からの音——クラシック音楽の中継地・満洲』近代文藝社、2014 年
- ・満州教育専門学校付属小学校・奉天千代田小学校同窓会『会報 ちよだ』第 12 号
- ・「奉天ちよだまっぷ」(地図)

(文責：森巧)

2015年度（2015年8月～2016年7月）

「満洲の記憶」研究会活動記録

- 2015年8月1日 20世紀大連会議関係者秦源治氏インタビュー（第4回）参加者：大野絢也
- 2015年8月5日 藤田康夫氏インタビュー（第1回）参加者：湯川真樹江
- 2015年8月7日 博多港引揚記念碑訪問・見学 参加者：大野、湯川
- 2015年8月20日～21日 中国黒龍江省鶴崗市訪問 参加者：菅野智博、佐藤量
- 2015年8月21日 中国遼寧省撫順市訪問 参加者：湯川
- 2015年8月29日～30日 五族の墓奉賛会参加 参加者：飯倉江里衣、佐藤量
- 2015年9月12日 一橋祭準備会 参加者：飯倉、尹国花、菅野、佐藤量、湯川
- 2015年9月19日 久保田諫氏インタビュー（第2回）参加者：飯倉、大野、佐藤量、湯川
- 2015年9月20日 松川町増野開拓地訪問・『胡桃澤盛日記』完結記念会参加 参加者：飯倉、大野、佐藤量、湯川
- 2015年9月21日 平成27年豊丘村海外犠牲者慰霊祭参加・飯田市歴史研究所本島和人氏と面談 参加者：飯倉、大野、湯川
- 2015年9月27日 第18回定例会（於一橋大学）参加者：飯倉、尹、大野、菅野、瀬尾光平、森巧、湯川
- 2015年10月3日 一橋祭準備会・東京新聞取材（於一橋大学）参加者：尹、大野、菅野、佐藤量、瀬尾、森、湯川
- 2015年10月10日 東洋文化研究会主催・大島満吉氏講演会参加 参加者：湯川
- 2015年10月16日 平和祈念展示資料館訪問・見学 参加者：大野
- 2015年10月18日 一橋祭講演会・ニューズレター第2号の打合せ 参加者：飯倉、尹、大野、菅野、森、湯川
- 2015年10月29日 牡丹江女学校同窓会参加 参加者：大野、尹、菅野
- 2015年11月1日 第3回講演会（2015年一橋祭）参加者：飯倉、尹、大野、菅野、佐藤仁史、佐藤量、瀬尾、森、湯川
- 2015年11月3日 ヤゴダ会慰霊祭参加 参加者：湯川
- 2015年11月19日 満洲引揚関係者（延吉）猪伏昌三氏訪問 参加者：佐藤量
- 2015年11月28日 第19回定例会 参加者：飯倉、尹、大野、菅野、佐藤量、瀬尾、森、湯川

- 2015年11月29日 満洲引揚関係者(大連)笠原雅子氏訪問 参加者:菅野、佐藤量
- 2015年12月1日 長春会会長磯部荀子氏インタビュー(第5回) 参加者:菅野、湯川
- 2015年12月9日 満鉄会訪問 参加者:大野、瀬尾、湯川
- 2015年12月16日 第7回研究会作業日 作業内容:寄贈・貸借資料のデータ化
- 2015年12月21日 東京開拓団関係者石飛良江氏訪問 参加者:尹、大野
- 2015年12月22日 第8回研究会作業日 作業内容:寄贈・貸借資料の整理、データ化
- 2016年1月17日 蘭星会新年会参加 参加者:飯倉、瀬尾、湯川
- 2016年1月30日 大同学院二世の会新年会参加 参加者:菅野
- 2016年1月31日 長春会会長磯部荀子氏インタビュー(第6回) 参加者:菅野、森
- 2016年2月1日 第20回定例会・第9回作業日 参加者:飯倉、尹、大野、菅野、森、湯川
- 2016年2月4日 蘭星会交流会参加 参加者:飯倉、瀬尾、森
- 2016年2月11日 山田千里氏訪問 参加者:佐藤仁史、大野、菅野
- 2016年2月15日 満洲引揚関係者(長春)古海建一氏訪問 参加者:尹、大野、菅野、森
- 2016年2月21日 長春会の集い参加 参加者:菅野
- 2016年2月24日 満鉄会訪問 参加者:大野、森、湯川
- 2016年3月5日 2015年度秋季大会・第21回定例会 参加者:飯倉、尹、大野、菅野、佐藤量、瀬尾、森、湯川
- 2016年4月16日 第17回哈爾濱学院記念碑祭参加 参加者:大野、菅野、森
- 2016年4月18日 第43回満蒙大陸林業人物物故者慰霊祭参加 参加者:大野
- 2016年4月21日 満鉄会訪問 参加者:大野、森、湯川
- 2016年4月21日 朝鮮引揚関係者(新義州)石崎清之氏訪問 参加者:尹、菅野
- 2016年4月23日 20世紀大連会議関係者秦源治氏訪問 参加者:大野、菅野、佐藤仁史、佐藤量
- 2016年5月11日 満鉄会訪問 参加者:大野、瀬尾、湯川
- 2016年5月11日 満洲引揚関係者(延吉)猪伏昌三氏訪問 参加者:佐藤量
- 2016年5月16日 満洲引揚関係者(延吉)西田純明氏訪問 参加者:尹
- 2016年5月14日 大同学院二世の会(解散)総会・懇親会参加 参加者:菅野
- 2016年5月19日 第64回奉天会参加 参加者:大野、森
- 2016年5月26日 満鉄会訪問 参加者:菅野
- 2016年5月27日 満鉄会訪問 参加者:大野、菅野、湯川
- 2016年5月31日 第10回研究会作業日

- 作業内容：寄贈・貸借資料の整理
- 2016年6月1日 満洲引揚関係者（哈爾濱）辰巳律子氏訪問（第2回） 参加者：大野、菅野
- 2014年6月4日 第22回定例会・勉強会 参加者：尹、大野、菅野、佐藤量、瀬尾、森、湯川
- 2016年6月5日 満洲引揚関係者（大連）笠原雅子氏インタビュー（第5回） 参加者：菅野、佐藤量
- 2016年6月5日 「満洲興農合作社同人を偲ぶ集い」参加 参加者：湯川
- 2016年6月10日 満洲引揚関係者（大連）柴田照子氏インタビュー（第1回） 参加者：佐藤量
- 2016年6月15日 満洲引揚関係者（延吉）西尾安弘氏訪問 参加者：尹、湯川
- 2016年6月17日～19日 宮崎県延岡市訪問 参加者：大野、菅野、佐藤仁史、湯川
- 2016年6月27日 上田禮子氏訪問 参加者：大野、菅野
- 2016年6月30日 外林会関連資料調査 参加者：大野、佐藤仁史、湯川
- 2016年6月30日 大同学院関連資料整理 参加者：大野、菅野、佐藤仁史、瀬尾、森、湯川
- 2016年7月11日 20世紀大連会議関係者秦源治氏訪問 参加者：大野、林志宏
- 2016年7月20日 満鉄懇談会 参加者：大野、菅野
- 2016年7月23日 第23回定例会・勉強会 参加者：飯倉、尹、大野、菅野、佐藤仁史、佐藤量、瀬尾、森、湯川
- 2016年7月23日 2016年度春季大会 参加者：飯倉、尹、大野、菅野、佐藤仁史、佐藤量、瀬尾、森、湯川
- 2016年7月25日 満洲医科大学関係者石崎優子氏訪問 参加者：佐藤量
- 2016年7月29日 満洲引揚関係者（大連）柴田照子氏インタビュー（第2回） 参加者：佐藤量

（文責：尹国花）

おしらせ

資料提供のお願い

「満洲の記憶」研究会では、満洲に関する資料を収集しております。「寄贈資料目録」に示したように、これまでに書籍や会誌、写真、ハガキ、書簡など多数の資料を寄贈・貸与していただきました。これらの資料は満洲の記憶を継承する上で極めて貴重な資料であると考えております。

ご提供いただきました資料は本研究会が整理・管理し、学術研究において活用いたします。資料の公開方法は、資料目録を作成して本ニューズレターに掲載させるという形式を採ります。提供資料に含まれる個人情報等には深甚な配慮をい

たします。

また、お手持ちの資料には、貴重なもの、思い入れの強い品でお手元に置いておかれたいものなどもおありのことと思います。資料のご提供ではなくとも、本研究会の編集委員メンバーによって複製・撮影等をさせていただくという方法もございます。そのような希望がありましたら、ご相談いただければと存じます。ぜひ情報を本研究会までお寄せくださいますよう、ご協力お願いいたします。

カンパの御礼

「満洲の記憶」研究会では、皆様からカンパを募ることにしております。多くの方々より御厚意を賜りまして誠にありがとうございました。皆様方のあたたかい御支援に、あらためて心より御礼申し上げます。皆様からのカンパは研究会の活動が今後さらに発展できますよう、大切にさせていただき所存でございます。

カンパをいただきました皆様の御厚意に対し感謝の意を込めて、ここに2015年度（2015年7月31日—2016年7月31日）に御支援いただいた皆様のお名前を掲載させていただきます。（50音順）

池田雅躬様	3口
大島満吉様	3口

石田むつ子様	1 口	古海建一様	5 口
石飛良江様	5 口	松谷様	10 口
笠原雅子様	5 口	山縣よしみ様	1 口
カタギリエイコ様	2 口	山田伸男様	1 口
神保映子様	1 口	ヤマナカショウイチ様	1 口
上林雅子様	1 口	吉田澄子様	5 口
柴田親宏様	5 口	匿名	10 口
秦源治様	10 口		

カンパのお願い

「満洲の記憶」研究会では、継続して皆様からのカンパを募っております。本研究会は若手研究者・大学院生が中心となって運営しているため、これまで編集委員の寄付によって活動を続けてまいりました。

しかし、活動範囲が全国に拡がり、予想以上に多くの資料が集まったことにより、資料調査や整理・電子化などに使用する資金が慢性的に不足する状況となっております。そのため研究活動の資金使用のみに限定した口座を開設し、研究会の活動に御賛同いただける方から、御支援を賜りたく存じます。カンパは1口1,000円で、文末に記載している銀行口座へお振込いただけたら幸いです。

なお、御支援をいただいた方には、ニューズレター内にてお名前を掲載し、御支援いただいたことを皆様に紹介させていただく予定です（お名前の掲載を希望されない方は事前に御連絡ください。そ

のように対応いたします）。また、カンパしてくださった方は、必ず本研究会宛にメールまたはお電話で御連絡ください。

本件に関して、ご不明な点がございましたら研究会編集委員の菅野智博（電話番号：080-6563-3766）までご連絡ください。研究会としても誠実かつ積極的に活動をしてまいりますので、御支援のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

「満洲の記憶」研究会銀行口座
銀行：三井住友銀行
支店：国立支店（店番号：666）

種類：普通預金
口座番号：8088124
口座名：菅野智博（カンノ トモヒロ）

会員募集及び情報配信のおしらせ

本研究会は随時会員を募集しています。年会費は無料となっております。会員には、ニューズレター及びイベント情報の配信を行います。入会希望者は次の連絡先まで御連絡ください。

メールアドレス：manshu-kioku@live.jp
電話：080-6563-3766（菅野智博）
ブログ：<http://manshunokioku.blog.fc2.com/>
Facebook：「満洲の記憶」研究会
<https://www.facebook.com/groups/359559330877470/>

イベント情報

本研究会では次のイベントを開催する予定です。詳細はブログ、Facebookなどでご確認ください。皆様のご参加をお待ちしております。

- 2016 年度秋季大会：2017 年 2 月～3 月を予定。
- 2017 年度春季大会：2017 年 4 月～7 月を予定。

《满洲记忆》(“满洲记忆”研究会通讯)第3期

中文目录

石崎家从朝鲜·新义州遣返的记录 石崎操
立冈皓男先生所藏资料目录 飯倉江里衣、尹国花、大野絢也
菅野智博、瀬尾光平、森巧、湯川真樹江
《わが心のハルビン》(《我心中的哈尔滨》)目录 佐藤仁史等
岡山哈尔滨会访问记 菅野智博
中国黑龙江省鹤岗市调查记 佐藤量
满铁安魂祭参加记 湯川真樹江
2015年度“满洲记忆”研究会秋季大会报告提要
2016年度“满洲记忆”研究会春季大会报告提要
寄赠资料目录
2015年度“满洲记忆”研究会的活动记录
会务启示

Memories of Manchuria (Newsletter of the Society for “Memories of Manchuria”) No. 3

Contents

Record of the Ishizaki Family’s Repatriation from Sinuiju, Korea	ISHIZAKI Isao
Bibliography of the Late Akio Tatsuoka Collections	IIKURA Erii, YIN Guohua, OHNO Junya, KANNO Tomohiro, SEO Kohei, MORI Takumi, YUKAWA Makie,
Index of Articles in the Bulletins of the Okayama Harbin Association	SATO Yoshifumi, etc
Field Report on the Okayama Harbin Association	KANNO Tomohiro
Field Report on Hegang City, Heilongjiang Province, China	SATO Ryo
Report of a Memorial Service Organized by the Mantetsu Association	YUKAWA Makie
Summary Report of the Autumn 2015 Meeting	
Summary Report of the Spring 2016 Meeting	
2015 Chronology of the Society for “Memories of Manchuria” Activities	
2015 List of Donated Materials	
Announcements	

編集後記

会の結成から3年がたち、『満洲の記憶』も第3号を刊行することができました。関係者の方々のご協力がなければ、会の活動をここまで進めることはできませんでした。心より感謝申し上げます。

本号では、『石崎操日記』や「故立岡皓男氏所蔵資料目録」を掲載しています。これらは石崎操氏や立岡皓男氏がその貴重な経験を経て残してきた手記・資料であり、個々の思いや足跡が刻みこまれています。これらの史資料は、当時の状況を把握するだけでなく、それぞれのライフストーリーを知る上でも重要です。ご家族によって長年保管されてきたこれらの史資料を皆様に紹介し、その価値を共有したいと思います。また、本研究会では引揚団体や残留婦人の現在の活動や語りにも着目し、参加記と調査記を掲載しました。彼、彼女らの思いや揺れ動く様子にもご注目いただければ幸いです。

本研究会はこれまで満洲に関わる人々の記憶に注目してきましたが、引揚者の方々から話を伺うにつれて、満洲という地域に限定されない人的・物的移動があったことが明らかとなり、それは本研究会に他の地域の史料が集まってきたことも大きく関係しています。朝鮮や台湾など他の地域もあわせて考察する必要を感じました。今後は地域を限定せずに、より幅広い視野でもって調査・研究を進めていく予定です。次号も是非、ご期待ください。(湯川)

『満洲の記憶』 第3号

発行日：2016年10月31日

編集：「満洲の記憶」研究会編集委員会

編集委員：

飯倉江里衣 尹国花

大野絢也 菅野智博

佐藤仁史 佐藤量

新谷千布美 施昱丞

瀬尾光平 森 巧

湯川真樹江 林志宏

発行：「満洲の記憶」研究会

〒186-8601 東京都国立市中2-1

一橋大学大学院社会学研究科

佐藤仁史研究室 気付

Tel・Fax：0420-580-8885

◇本誌は年刊オンラインジャーナルで、毎年9月に刊行されます。本会学年暦は、毎年8月1日から次年7月31日です。

◇本誌は一橋大学機関リポジトリにおいて配付しています。

[http://hermes-ir.lib.hit-](http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/27095)

[u.ac.jp/rs/handle/10086/27095](http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/27095)

◇「満洲の記憶」研究会連絡先

・メール：manshu-kioku@live.jp

・電話：080-6563-3766（菅野智博）

・<http://manshunokioku.blog.fc2.com/>

（研究会ブログ）

ISSN 2189-390X